

ケチュア語アヤクーチョ方言の言語類型論的特徴*

諸隈 夕子

y.ukumari322@gmail.com

キーワード: ケチュア語アヤクーチョ方言、文法記述、言語類型論

要旨

ケチュア語アヤクーチョ方言(以下アヤクーチョ方言)[ISO 639-3: quy]は、南米アンデス地方の先住民言語であるケチュア語の地域変種の1つである。アヤクーチョ方言はペルー南部のアヤクーチョ県を中心に使用されている。ケチュア語は、個別の文法現象だけでなく、全体的な特徴も地域・系統を超えた言語類型である「アルタイ型言語」の一例として、言語類型論研究で注目されることもある。このような背景から、この論文ではアヤクーチョ方言の文法記述を、筆者のフィールドワークで得られた最新のデータと言語類型論の知見を元に再構成し、この言語の類型論的な全体像を提示することを目指す。具体的には、アヤクーチョ方言の言語類型論的特徴を、音韻論・形態論・統語論の3つの観点から概観する。アヤクーチョ方言の音韻は類型論的に単純な特徴を持つ。形態法は発達しており、特に用言形態法で表せる概念が豊富である。統語法はアラインメントと語順の観点では単純であるが、従属節のうち体言化従属節は統語法と意味や形態法が相互作用する複雑な特徴を見せる。

1. はじめに

本稿は、ケチュア語の地域変種の1つであるアヤクーチョ方言の文法的特徴を俯瞰的に記述し、その類型論的な全体像を概説することを目的としたものである。本節では導入として、ケチュア語およびアヤクーチョ方言の地理・社会的位置づけと、研究史の概略を記述する。

1.1. ケチュア語の社会的位置づけと歴史

ケチュア語(Quechua, Runa simi)とは、南米大陸西部に位置するアンデス地方で使用される先住民言語の1つである。ケチュア語の話者数は現在800万人程度とされ(Adelaar 2012b: 578)、現在のコロンビアからアルゼンチン北部にかけて使用されている。

ケチュア語は、アンデス先住民族のアイデンティティのシンボルの1つとして現在重要視

* 本稿に関する内容については以下の研究者から貴重な意見および情報をいただいた: 鈴木唯、谷川みずき、長屋尚典、林真衣、吉田樹生(敬称略)。並びに、筆者のフィールドワークに協力頂いた11名のアヤクーチョ方言話者の方々に心から謝意を表す。無論、本稿の誤りは全て著者の責任である。本研究はJSPS 科研費JP21J13736(代表: 諸隈夕子)、JP19H01264(代表: 松本曜)、および2019年度布施学術基金学術奨励費(若手研究者研究費)の助成を受けたものである。また、本研究は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」(代表者: 窪園晴夫)の研究成果である。

されている (Adelaar and Muysken 2004: 165–167, 254–259, Adelaar 2012a)。アンデス地域諸国の独立以来、ケチュア語をはじめとする先住民言語の復興・保存活動が活性化している。中でもペルー・ボリビア・エクアドルの3ヶ国では現在ケチュア語が公用語の1つとして制定されており、保全・教育政策が進められている (Adelaar and Muysken 2004: 605–609, Adelaar 2012a: 19–30)。

ケチュア語の祖地には諸説ある。インカ帝国の首都であるクスコ周辺を祖地とする説が伝統的であり、ペルー中央部の高原地帯から現在のリマ周辺にあたる海岸部にかけての地域とする説、アンデス地方東部の森林地帯とする説も唱えられている (Adelaar and Muysken 2004: 180–182)。これらの中では伝統的なクスコ祖地説が現在でも強い影響力を持つ一方で、言語変種の多様性の観点からはペルー中央部を祖地とする説が妥当と主張されている (Adelaar and Muysken 2004: 180–182, Adelaar 2012b: 587–589)。

ケチュア語は、歴史的な観点ではインカ帝国の公用語としてとりわけ注目されている。インカ帝国は、12世紀にクスコを首都として興ったケチュア族(インカ族)の王国を起源とし、15世紀から16世紀にかけてアンデス地方一帯を支配した帝国である (Encyclopædia Britannica n.d.)。ケチュア語はインカ帝国の成立以前にペルー各地で使用されていたとされる (Adelaar and Muysken 2004: 180–182, Adelaar 2012b: 587–589)。インカ帝国は *mitma*¹ と呼ばれる領内の植民政策によってケチュア語話者を各地に移住させ、ケチュア語のさらなる普及に務めた (Adelaar and Muysken 2004: 167, van de Kerke and Muysken 2014: 139)。

ケチュア語の普及には、アンデス地方に対するスペインの植民地政策も大きく寄与している。インカ帝国は1532年にフランシスコ=ピサロらによって征服され、以降スペインによる植民地支配を受けた。スペイン人宣教師がインカ帝国領民へのキリスト教布教にケチュア語を用いたことにより、アンデス地域へのケチュア語の普及・定着がさらに進んだとされる (Adelaar and Muysken 2004: 182–183, Adelaar 2012b: 589–590, van de Kerke and Muysken 2014: 139)。

このように、ケチュア語のアンデス地域における普及には、(i) インカ帝国成立以前の使用域の拡張 (Adelaar and Muysken 2004: 23)、(ii) インカ帝国による公用語化と移住政策、(iii) スペイン人によるキリスト教布教活動におけるケチュア語の使用の3つの段階があるとされる。インカ帝国による言語政策はケチュア語をリング・フランカとして普及させたものの、ケチュア語をアンデス地域一帯の主要な言語として定着させた最も大きな要因はスペイン人による布教および支配政策であるとされる (細川 1988b: 1598 van de Kerke and Muysken 2014: 127)。

キリスト教布教の過程でケチュア語の普及が進んだものの、1770年以降、信仰および行政の場におけるケチュア語の使用は抑圧されるようになった (Adelaar and Muysken 2004: 167)。このような抑圧を経たものの、ケチュア語はアンデス地方で最も話者の多い先住民言語として現代でも大きな影響力を持っている。

¹ 「移住させる」「植民させる」「拡大する」などを意味する。この政策による植民者は *mitmaq(-kuna)* と呼ばれる。

1.2. ケチュア語の地域変種

ケチュア語はバラエティに富んだ地域変種を持つ言語である。ケチュア語の地域変種はケチュア I (Torero 1964) あるいはケチュア B (Parker 1963) と呼ばれる系統と、ケチュア II あるいは (Torero 1964) ケチュア A (Parker 1963) と呼ばれる系統²の 2 つに大別される。ケチュア I (Torero 1964) はペルー中央部で使用される変種からなり、より古いケチュア語の特徴を残すとされる。それ以外の変種は、ケチュア II に属する。

ケチュア語諸変種の系統を論じる上では、一般にケチュア I とケチュア II の下位分類である IIA、IIB、IIC からなる 4 つの系統が分類の基本として扱われている。ケチュア II に属する変種はユンガイ (Yungay) 語群とチンチャイ (Chinchay) 語群に二分され、ユンガイ語群がケチュア IIA と呼ばれる。チンチャイ語群はさらにケチュア IIB とケチュア IIC の 2 つの系統に下位分類される。図 1 は、ケチュア語諸変種の系統関係を、代表的な変種名を挙げながら体系化したものである。図 1 では分類の基本となる系統名を四角、本稿で扱うアヤクーチョ方言を丸で囲んでいる。

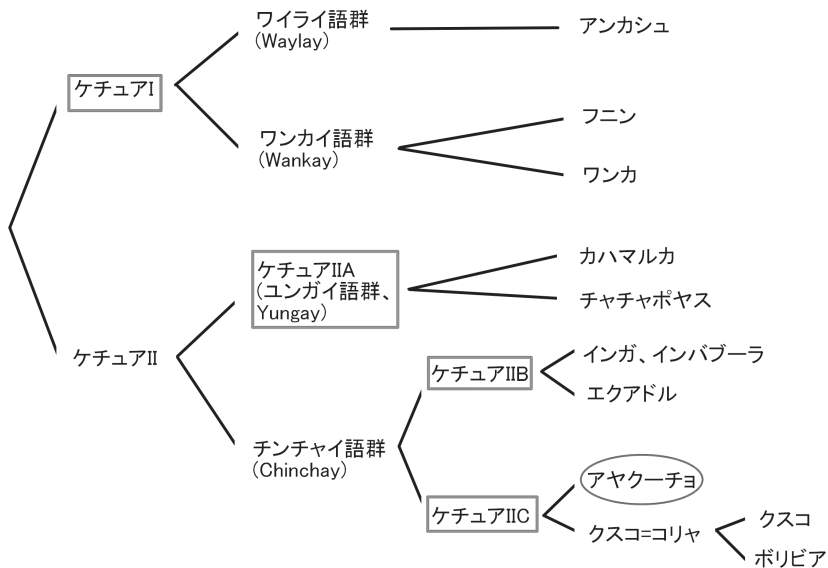


図 1. ケチュア語諸変種の系統関係 (細川 1988b: 1593 を簡略化)

本稿が記述するアヤクーチョ方言は、ケチュア IIC に属する変種である。

ケチュア語の諸系統は、概ね地理的にグループ化可能である。図 2 はアンデス地方の主要な都市³・地名および現代における各系統のおおよその分布を示したものである。

² 現在のケチュア語研究では Torero (1964) の用語法が一般化しているため、以下ケチュア I、ケチュア II と呼ぶ。

³ 首都を星印(★)、その他の都市を黒丸(●)で示す。

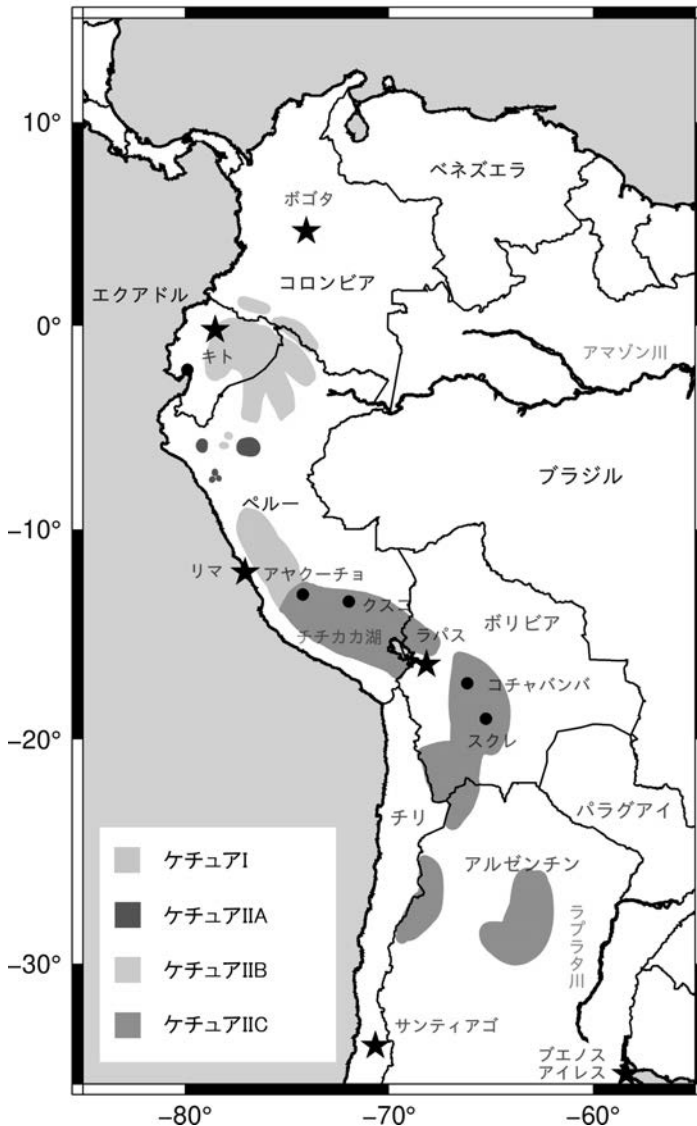


図 2. ケチュア語の 4 系統の分布 (細川 1988b: 1593、Adelaar and Muysken 2004: 169、van de Kerke and Muysken 2014: 129 を参照)

図 2 で示す通り、ケチュア I に属する変種はペルー中央部、ケチュア IIA に属する変種はペルー北部、IIB に属する変種はエクアドル・コロンビアからペルー北部にかけて、ケチュア IIC に属する変種はペルー南部およびボリビア以南に分布している。

ケチュア語の各地域変種は、伝統的には概ね「ケチュア語〈地域名〉方言」として呼ばれてきた⁴。接頭辞を持たず接尾辞を多用する膠着的な形態法や、おおよその音韻体系などは変種を通じて共通している。一方で、動詞形態法における接尾辞の体系、および個々の接尾辞の形態を中心に形態法における差異は大きい(細川 1988b: 1595)。中でもケチュア I に属する諸変

⁴ コロンビアの Inga (Ingano) と呼ばれる変種など、例外も見られる。

種とケチュア II に属する諸変種の間では音韻・形態的な差異が大きく、相互理解が非常に困難となる (Adelaar and Muysken 2004: 168, Luykx, García Rivera, and Julca Guerrero 2016)。さらに、地域変種間の差異は必ずしも連続的なものではなく、特に音韻や動詞の形態法においては非連続的な差異が見られる (細川 1988b: 1589)。

このような地域変種間の差異の大きさから、特に通地域変種的な視点でのケチュア語研究においては、各地域変種を 1 つの言語として扱い、地域変種の総称は Quechuan languages (ケチュア諸語、ケチュア語族) と呼ぶことが現在一般化している (Adelaar and Muysken 2004: 168, 細川 1988b: 1589-1591)。ケチュア語地域変種間の差異はケチュア語研究における重要な問題であるが、本稿の趣旨からは外れるため、本稿では慣例的な呼称を採用する。具体的には、本稿の分析の対象である Ayacucho Quechua や Chanka と呼ばれる言語変種を便宜的に「ケチュア語アヤクーチョ方言」(以下アヤクーチョ方言) と呼ぶ。その他の地域変種は「(地域名) 方言」と呼び、地域変種全体をケチュア語と呼ぶ。

1.3. ケチュア語アヤクーチョ方言

本稿が記述の対象とするアヤクーチョ方言(アヤクーチョ・ケチュア、アヤクチョ語、チャンカ語とも)は、ペルー南部のアヤクーチョ県・アプリマク県東部を中心に使用される変種である。話者はおよそ 90 万人 (University of Hawaii at Manoa 2022) とされ、中高年および郊外・農村部からの通勤者を中心に、都市部でもしばしば日常的に使用されている。話者の多くはスペイン語との流暢なバイリンガルである一方、主に農村部の話者や都市部の高齢者の話者の中にはアヤクーチョ方言のモノリンガルも見られる。バイリンガル・モノリンガルを問わず、スペイン語からの借用語は頻繁に用いられる。

アヤクーチョ方言は、ケチュア語の中でも特異な特徴を見せる言語であり、ケチュア語地域変種間の類型論や系統関係を分析する上で重要な変種である。アヤクーチョ方言はケチュア語の系統におけるケチュア IIC (第 1.2 節、図 1 参照) に属し、文法的特徴は同系統のクスコ方言との共通性が非常に高いとされる (細川 1988a)。一方で、有気音・放出音の区別が無い (Adelaar and Muysken 2004: 187) など、同系統の言語変種には無く、系統的には離れたケチュア I の変種と共通する特徴も見せる (細川 1988b: 1598 細川 1988a: 457-458)。このように、アヤクーチョ方言の文法記述とその類型論的特徴の分析は、ケチュア語の類型論的研究の一事例としてのみでなく、ケチュア語内の類型論的多様性を論じる上でも重要である。

1.4. ケチュア語文法研究

ケチュア語の文法研究は、古くには 16-17 世紀の宣教師による文法記述 (González Holguín 1607, Santo Tomás 1560a,b) に始まり、各方言の参照文法やドキュメンテーション (Adelaar 1977, Parker and Sola 1964, Parker 1969, Shimelman 2017, Soto Ruiz 1976, Weber 1989, Zariquiey and Córdova 2008)、生成文法をはじめとする言語理論の分野 (Cole and Hermon

2011, Lefebvre and Muysken 1988)、文法現象の類型論 (Campbell 2012, Guillaume and Rose 2010, Morokuma 2022, van Gijn 2014 など) と広がりを見せている。南米の先住民言語研究におけるケチュア語研究の概略は、Adelaar (2012a), Adelaar and Muysken (2004), and van de Kerke and Muysken (2014) など記述されている。

ケチュア語は、典型的な膠着的形態法を取る言語として知られる。人称・数・格・テンス・アスペクト・ムードなど、種々の文法的カテゴリーを接尾辞として標示する。膠着的な形態法をはじめとするケチュア語文法の全体的な特徴に対しては、系統・地域を超えた言語類型の一つである「アルタイ型言語」との近似性が指摘されている (風間 2014)。

さらにケチュア語の個別的な文法現象にも、言語学的に興味深い特徴を見せるものが多い。具体的には、オノマトペ (Morokuma 2022)、示差的項標示 (differential argument marking: DAM: Cole and Hermon 2011, Lefebvre and Muysken 1988, 諸隈 近刊)、「方向接尾辞」による空間・時間的ダイクシス標示 (Kalt 2015) などが、音韻論、形態統語論、意味論、語用論など理論言語学の様々な分野で研究されている。さらに近年では移動表現 (Chow 2021) や連合動作の表現 (associated motion: Guillaume and Rose 2010) など、言語類型論研究においても注目を集めている。

1.5. 本稿の目的

このような背景から、本稿ではケチュア語アヤクーチョ方言の類型論的特徴を、これまでの文法記述 (Parker 1969, Soto Ruiz 1976, Zariquiey and Córdova 2008) に加えて筆者のフィールドワークで得られた最新のデータに基づいて概説する。具体的な分野として音韻・形態・統語法の3点に注目しつつ、この言語の文法とその類型論的な特徴を総論的に記述する。

提示する例文は基本的に先行研究 (Parker 1969, Soto Ruiz 1976, Zariquiey and Córdova 2008) やテキスト (Parker 1963) からの引用または筆者がフィールドワークで得たデータ⁵であり、出典を併記している。例文を元にしたバリエーションについては筆者の作例である。

以下、アヤクーチョ方言の文法的特徴について、第2節では音韻論、第3節では形態論、第4節では統語論に注目して記述する。第5節は結語である。

2. 音韻論

本節では、アヤクーチョ方言の音韻論的特徴を概説する。第2.1節では音素目録、第2.2節では音節構造、第2.3節ではアクセントについて記述する。

⁵ 正書法の統一のため、適宜原文の表記に対し筆者による変更を加えている。

2.1. 音素目録

アヤクーチョ方言の音素目録は、通言語的に見て比較的小規模である。以下では母音目録(2.1.1)、子音目録(2.1.2)を概説し、通言語的な評価について述べる(2.1.3)。

2.1.1. 母音

アヤクーチョ方言は他のケチュア語変種と同様、三母音体系をとる言語である。具体的なアヤクーチョ方言の母音の音素目録は表1の通りである。

表 1. アヤクーチョ方言の母音

| | 前舌 | 中舌 | 奥舌 |
|-----|--------|----|----------|
| 狭母音 | i[i~e] | | u[u~u~o] |
| 広母音 | a[a~æ] | | |

アヤクーチョ方言の母音体系は/a/、/i/、/u/の3音素からなる。短母音と長母音の区別は存在しない。

アヤクーチョ方言の母音のうち、/i/と/u/は後述する子音/q/の直前・直後および/nq/、/rq/、/lq/、/wq/の直前⁶に現れる場合、それぞれ[e]、[o]の異音を取る(細川 1988b: 1602)。(1a)と(1b)、(2a)と(2b)はそれぞれ/i/と/u/が/q/の前後とそれ以外の子音の前後で実現する異音を示す例である(Parker 1969: 21)。

- | | |
|--|-------------------------------------|
| (1) a. <i>qina</i> [χena] 「ケーナ(縦笛の一種)」 | (2) a. <i>muqu</i> [moχo] 「膝」 |
| b. <i>hina</i> [xina] 「~のように、~のような」 | b. <i>muhu</i> [muxu] 「種」 |

このように、アヤクーチョ方言固有の音素体系においては[e]および[o]を/i/と/u/の条件異音とし、全体を3母音体系とする分析(Parker 1969: 21, Zariquiey and Córdova 2008: 32–34)が一般的である。

⁶ これは細川(1988b: 1602)がケチュア語諸変種の一般的な特徴として述べたものである。アヤクーチョ方言の文法記述においては、Parker(1969: 21)では/q/の直後または直前以外での/i/、/u/の後母音化を報告していない一方、Zariquiey and Córdova(2008: 33)は直前・直後以外の位置(例: *orqo* /urqu/「山」)の後母音化を報告している。Zariquiey and Córdova(2008: 33)では/q/が存在する場合に/i/と/u/がそれぞれ[e]、[o]の異音を取ると述べており、これらの異音を取る/i/、/u/と/q/の具体的な位置関係については言及していない。アヤクーチョ方言で後母音化が起こる範囲についてはさらなる分析の余地があるものの、細川(1988b: 1602)の記述はParker(1969: 21)とZariquiey and Córdova(2008: 33)両者の挙げる具体例と矛盾せず、この変種においても妥当であると筆者は考える。

しかし、Adelaar and Muysken (2004: 196) は、現代のケチュア語において従来の音韻規則からは予測不可能な [e] と [o] の分布が見られることを指摘し、現代のケチュア語・スペイン語バイリンガルによるケチュア語を 5 母音体系として分析している。アヤクーチョ方言にもこの音韻規則から予測できない位置にも [o] が現れうるということが報告されており (Parker 1969: 22)、音韻体系の変化が示唆される。

2.1.2. 子音

アヤクーチョ方言の子音体系は 15 種類の子音からなる。具体的な子音の音素目録は表 2 の通りである。

表 2. アヤクーチョ方言の子音

| | 両唇音 | 歯茎音 | 硬口蓋音 | 軟口蓋音 | 口蓋垂音 |
|------|------|------|--------|--------|--------|
| 閉鎖音 | p[p] | t[t] | ch[tʃ] | k[k] | |
| 鼻音 | m[m] | n[n] | ñ[ñ] | | |
| 摩擦音 | | s[s] | | h[x~h] | q[χ~h] |
| はじき音 | | r[r] | | | |
| 側面音 | | l[l] | ll[ʎ] | | |
| わたり音 | w[w] | | y[j] | | |

表 3 は、表 2 に示した各子音を語頭に持つ語彙素の例である。

表 3. アヤクーチョ方言の各子音を語頭に持つ語彙素

| 語頭子音 | 語彙素 | 音声転記 | 意味 |
|--------|----------------|-----------|--------------|
| (子音無し) | <i>inti</i> | [inti] | 「太陽」 |
| p | <i>punchaw</i> | [puntʃaw] | 「日・昼」 |
| t | <i>tuta</i> | [tuta] | 「夜」 |
| ch | <i>chisi</i> | [tʃisi] | 「夕方・夕暮れ時」 |
| k | <i>killa</i> | [ki.ʎa] | 「月」 |
| m | <i>musquy</i> | [musχoj] | 「夢」 |
| n | <i>nina</i> | [nina] | 「炎」 |
| ñ | <i>ñawi</i> | [ɲawi] | 「目」 |
| s | <i>sinqa</i> | [senχa] | 「鼻」 |
| h | <i>huñu</i> | [huɲu] | 「集まり」 |
| q | <i>quyllur</i> | [χojɲur] | 「星」 |
| r | <i>rinri</i> | [rinri] | 「耳」 |
| l | <i>lawa</i> | [lawa] | 「ポタージュ風のスープ」 |
| ll | <i>lliklla</i> | [ʎikʎa] | 「伝統的な手織りの布」 |
| w | <i>wiqi</i> | [weχe] | 「涙」 |
| y | <i>yuyay</i> | [juja] | 「知識」 |

このように、アヤクーチョ方言には有声音・無声音の区別が見られない。ただし、スペイン語を中心とした借用語ではスペイン語の音素体系に準じた有声・無声等の区別が見られる。/h/と/q/の区別は、Parker が調査・記述した 1969 年時点での「若い話者」の一部で曖昧化していることが報告されており (Parker 1969: 17–18)、筆者のフィールドワークで得られたデータでも曖昧化は観察される。

アヤクーチョ方言の子音体系は、ケチュア語諸変種の中では 2 つの大きな特徴を見せる。1 つは閉鎖音に対する有気音・放出音の区別が見られないことである。例えば、クスコ方言では *tanta*[tanta]「集まり」、*thanta*[tʰanta]「ぼろ布」、*t'anta*[t'anta]「パン」のように、閉鎖音 t、有気音 tʰ、放出音 t' が対立している。この対立はクスコ方言やコチャバンバ方言など、アヤクーチョ方言と同系統であるケチュア IIC の変種を中心に見られる。アヤクーチョ方言にこのような対立は無く、これらの変種と対応する語彙素は全く異なる形態を取る (i.e. クスコ方言 *tanta*[tanta]「集まり」vs アヤクーチョ方言 *huñu*[hupu]「集まり」)か、同音異義語となっている (i.e. クスコ方言 *wayta*[wajta]「花」、*wayt'a*[wajt'a]「泳ぐ」vs アヤクーチョ方言 *wayta*[wajta]「花」「泳ぐ」)。

この特徴は、アヤクーチョ方言とその他の地域変種との分化が早期の段階で起きたことを示すものとされる (細川 1988a: 457)。ケチュア語における有気音・放出音と無標な閉鎖音の対立はアイマラ語 (Campbell 2012: 269) ないしケチュア語普及以前に使用されていた先住民言語 (Adelaar and Muysken 2004: 599-600) との接触により獲得したものと分析されている。そしてこの対立は、アヤクーチョ方言では失われた特徴とされる (細川 1988a: 457)。

もう 1 つの特徴は、/q/の摩擦音としての実現である。他のケチュア語の変種の多くでは/q/が閉鎖音 [q] として実現し、音節末では摩擦音 ([χ]) 化する。例えば、ポトシ方言における/q/は、音節頭子音としては *alqu*[alqɔ]「犬」、*nuqa*[nɔqɑ] のように閉鎖音 [q] または [g]、語末では *llaqta*[ɬaχta]「町」のように摩擦音 [χ] として実現する (細川 1988b: 1602)。一方アヤクーチョ方言では、*allqu*[alχɔ]「犬」、*ñuqa*[ɲoχɑ]「私」、*llaqta*[ɬaχta]「町、村」のように、音節頭、音節末を問わず摩擦音 [χ] として実現する (細川 1988a: 457、語彙素例は筆者による)。

2.1.3. 音素目録の類型論的評価

アヤクーチョ方言は、類型論的に比較的単純な音素体系を持つ言語と言える。世界の諸言語の文法特徴の web データベースである The World Atlas of Language Structures (WALS、<https://wals.info/>; Dryer and Haspelmath 2013) では、各言語が持つ母音および子音の数を集計し、その多寡によって諸言語をいくつかのグループに分類している (Maddieson 2013a,c)。表 4 は母音数による言語の区分と、それぞれの区分にあたる言語数をまとめたものである。母音は、2~4 個持つ言語が「小さい母音体系 (Small vowel inventory)」、5~6 個持つ言語が「平均的な母音体系 (Average vowel inventory)」、7~14 個持つ言語が「大きい母音体系 (Average vowel inventory)」と 3 段階に分類されている (最小値 2、最大値 14; Maddieson 2013c)。表 5

表 4. 母音数による言語の区分

| 母音数 | 区分 | 言語数 |
|------|-----|-----|
| 2~4 | 小さい | 93 |
| 5~6 | 平均的 | 287 |
| 7~14 | 大きい | 184 |
| 合計 | | 564 |

は子音数による言語の区分と、それぞれの区分にあたる言語数をまとめたものである。

表 5. 子音数による言語の区分

| 子音数 | 区分 | 言語数 |
|-------|-------|-----|
| 6~14 | 小さい | 89 |
| 15~18 | やや小さい | 122 |
| 19~25 | 平均的 | 201 |
| 26~33 | やや大きい | 94 |
| 34~ | 大きい | 57 |
| 合計 | | 563 |

子音は、6~14 個持つ言語が「小さい (Small)」、15~18 個持つ言語が「やや小さい (Moderately small)」、19~25 個持つ言語が「平均的 (Average)」、26~33 個持つ言語が「やや大きい (Moderately large)」、34 個以上持つ言語が「大きい (Large)」と 5 段階に分類されている (最小値 6、最大値 122; Maddieson 2013a)。これらの分類の中では、アヤクーチョ方言の母音体系 (3 個) は小さい母音体系であり、子音体系 (15 個) はやや小さめの子音体系と評価される。

さらにアヤクーチョ方言は、類型論的に母音の数が子音の数に比べて少ない言語といえる。WALS では各言語が持つ母音と子音の数を元に、母音数に対する子音数の比率を算出し、この高さに基づいて諸言語を 5 グループに分類している。表 6 は子音数/母音数の比の高さによる言語の区分と、それぞれの区分にあたる言語数をまとめたものである。

表 6. 子音数/母音数の比による言語の区分

| 子音数/母音数の比率 (r) | 区分 | 言語数 |
|---------------------|------|-----|
| $r \leq 2.0$ | 低い | 58 |
| $2.0 < r \leq 2.75$ | やや低い | 101 |
| $2.75 < r \leq 4.5$ | 平均的 | 234 |
| $4.5 < r \leq 6.5$ | やや高い | 102 |
| $6.5 < r$ | 高い | 69 |
| 合計 | | 564 |

具体的には、母音数に対する子音数の比率が 2.0 以下の言語を「低い (Low)」、2.0 より高く 2.75 以下の言語を「やや低い (Moderately low)」、2.75 より高く 4.5 以下の言語を「平均的 (Average)」、4.5 より高く 6.5 以下の言語を「やや高い (Moderately high)」、6.5 以上の言語を「高い (High)」と区分している Maddieson (2013b)。アヤクーチョ方言の母音数に対する子音

数の比率は 5.0 であり、これは Maddieson (2013b) の区分においてはやや高い比率となる。つまり、アヤクーチョ方言は比較的少数の音素からなる音素体系を持ち、特に子音数に比べても母音数が少ない言語であると言える。

2.2. 音節構造

アヤクーチョ方言で見られる音節構造は V、CV、VC、CVC の 4 通りである (Zariquiey and Córdova 2008: 35)。V および VC 音節は語頭以外には現れない。(3) は、アヤクーチョ方言の 2 音節語における音節構造の例である。(3) においてピリオドは音節境界を示す。

- | | |
|--------------------------------------|--|
| (3) a. <i>a.qu</i> V.CV 「砂」 | e. <i>all.qu</i> VC.CV 「犬」 |
| b. <i>a.tuq</i> V.CVC 「キツネ」 | f. <i>un.quy</i> VC.CVC 「病気」 |
| c. <i>ru.na</i> CV.CV 「人、男」 | g. <i>war.mi</i> CVC.CV 「女」 |
| d. <i>ku.nan</i> CV.CVC 「今日、今」 | h. <i>kaw.say</i> CVC.CVC 「命、生活」 |

(3) に示すように、借用語を除きアヤクーチョ方言に母音連続は見られない (Parker 1969: 19)。

アヤクーチョ方言では借用語を除き、一音節内での子音連続は見られない。子音で終わる語幹に単子音の接尾辞 (一人称単数所有者標示 -y など) や子音連続で始まる接尾辞 (二人称単数所有者標示 -yki など) が接続する場合、音節内の子音連続を避けるため、意味を持たない接尾辞 -ni が語幹と接尾辞の間に置かれる。(4) は子音連続を避ける -ni が使われる例である。

- (4) *kawsay*(-ni)-n*
生命-(意味無し)-3SG.POSS
「彼/彼女/その生命/生活」

(4) では、子音で終わる体言 *kawsay* 「生命、生活」に対し、接尾辞 -n によって所有者の人称・数が標示されている。ここでは、語末が子音連続となる **kawsay-n* が許容されないため、語幹 *kawsay* と -n の間に -ni が挿入されている。

同音節内の子音連続が起きない場合にも例外的に -ni が挿入される場合がある。例えば体言派生接尾辞 -yuq 「～を持つ」が子音終わりの語幹に接続する場合、-ni が挿入される。(5) は例外的に -ni が挿入される例である。

- (5) *kimsa chunka huk*(-ni)-yuq*
 3 10 1-(意味無し)-POSS
 「31」

(5)では、子音で終わる数詞 *huk* 「1」に対し、*-yuq* が接続している。この場合、*huk-yuq* は音韻規則上許容される音節構造であるものの、*huk* の後に *-ni* が挿入されている。

アヤクーチョ方言の語根は、オノマトペを除きほとんどが2音節の構造を取る。表7は、(Morokuma 2022)の調査による、音節数ごとに集計した非オノマトペ語根の数である。

表7. 音節数ごと非オノマトペ語根の数

| 音節数 | 語根の数 | 全語根に占める割合 |
|-----|------|-----------|
| 1 | 21 | 1.4% |
| 2 | 1156 | 76.6% |
| 3 | 270 | 17.9% |
| 4 | 57 | 3.8% |
| 5 | 5 | 0.3% |

表7に示す通り、アヤクーチョ方言に見られる語根はほとんどが2音節であり、1音節または4音節以上の語根は非常に少ない。4音節以上の語根は、ほとんどが *kunununu* 「地面などが震える」、*llipipipi* 「瞬く」のようなオノマトペである (Morokuma 2022)。

2.3. アクセント

アヤクーチョ方言のアクセントはストレスアクセントである。アクセントは語根・接尾辞・接語が結合した音声的語につき1つ現れる。アクセント位置は一音節語はその音節つまり語全体がアクセントを持つ。例えば *nán* 「道」や *qám* 「あなた」などは語全体がアクセントを持つ。

二音節以上の語のアクセント位置はほぼ一貫して語末から二番目の位置である (Parker 1969: 18, Zariquiey and Córdova 2008: 34)。(6)は2音節から4音節の語彙素について、そのアクセント位置を標示したものである。

- (6) a. *ú.ku* b. *u.kú.cha* c. *u.ku.má.ri*
 「中、下」 「鼠」 「熊」

さらに、二音節以上のアクセントは接尾辞・接語の添加等で1音節増えるごとに1音節後ろへ移動する。(7)は二音節語 *misi* 「猫」を元に、接尾辞・接語を添加した際のアクセント位置の変化を示したものである。

- (7) a. *mí.si* b. *mi.sí.cha* c. *mi.si.chá.lla*
 misi *misi-cha* *misi-cha=lla*
 猫 猫-DIM 猫-DIM=だけ
 「猫」 「子猫」 「子猫だけ」

このようにアヤクーチョ方言のアクセント位置は原則として各語の音節数で決定し、語彙的にアクセントを持つ語はほとんど無い。

例外として、*achacháw*「かわいそうに！」など特殊なアクセント位置を語彙的に持つ感嘆詞がある (Parker 1969: 24)。さらに、語幹や焦点を示す接語=*m(i)*、=*s(i)*などに強調の接語=*Á*が接続し、語末へアクセント位置が移動する現象 (Parker 1969: 85)が見られる。*-Á*は異形態として、語幹と接語=*ya*、=*wa*に接続するときは明示的な形態が無くアクセントの移動のみ、それ以外に接続する場合は=*á*として実現する⁷。例えば、*apura-ykú-y=ya*「急げ」や *wasi-n=s(i)*⁸「彼/彼女の家だそうだ」に対して*-Á*が接続すると、*apura-yku-y=yá*「急げ！」、*wasi-n=sá*「彼/彼女の家だって！」のようにアクセントが最終音節に移動する (Parker 1969: 85、形態素分析および=*Á*接続前の語形は筆者による)。

3. 形態論

アヤクーチョ方言は、他のケチュア語諸変種と同様に (第 1.4 節参照) 接尾辞を多用する膠着の形態法を取る言語である。格・人称・テンスなどの屈折、体言化・動詞化などの派生が意味的透明性の高い接尾辞で標示される。接尾辞を豊富に持つ一方で、接頭辞は一切持たない。アヤクーチョ方言が持つ接語も接尾辞と同様、ホストとなる語に後続する後接語 (enclitic) であり、前接語 (proclitic) は持たない。

アヤクーチョ方言の形態法は、体言形態法と用言形態法の 2 つの体系に分類できる。体言の形態法には格標示や所有者の人称・数標示といった屈折のほか、所有者を表す体言化、指小、動詞化などの派生が含まれる。用言の形態法には主語・目的語の人称・数標示、テンス、アスペクト、ヴォイスの屈折や、移動の方向標示、体言化などの派生が含まれる。

以下では、第 3.1 節でアヤクーチョ方言の形態法の前提となる品詞分類の概観を述べる。その上で、アヤクーチョ方言の形態法を体言形態法 (第 3.2 節)、用言形態法 (第 3.3 節) の 2 体系に分けて記述する。そして第 3.4 説では、体言と用言それぞれの形態法のテンプレートを記述する。

3.1. 品詞分類

ケチュア語諸変種において、動詞と体言はそれぞれ固有の形態法を取る異なる品詞クラスとして分類される (Adelaar 2012b: 594)。その他の小規模な品詞は体言と共通した特徴を持つため、動詞と非動詞への分類がより妥当とする指摘もある (Adelaar 2012b: 594)。個別

⁷ =*Á* が取る異形態のパターンについて、Parker (1969: 85) は明示的に説明していない。提示されている例を分析した結果、このような記述が妥当であると筆者は考える。

⁸ 母音に接続する場合に=*s*、子音に接続する場合に=*si*の異形態を取る。ここでは基底の形態である=*s*に=*á*が接続すると筆者は分析する。

の地域変種⁹の文法記述においては、品詞として動詞、体言 (substantive; Parker 1969, Weber 1989, Shimelman 2017, sustantivo; Zariquiey and Córdova 2008, noun; Adelaar 1977) の2つのカテゴリーを立てるのが一般的であり、さらに不変化詞 (particle; Parker 1969, Adelaar 1977, Shimelman 2017) が独立の品詞としてしばしば設けられる。

これらの先行研究では、動詞・体言・不変化詞は概ね以下のように記述されている。動詞はごくわずかな例外を除き、拘束形態素かつ語末が母音となる語根である。動詞は-*r(q)a* (過去時制標示) 等一部の接尾辞を伴うか、体言化接尾辞によって体言化される場合などの例外を除き、主語の人称・数を標示する接尾辞を必ず伴って現れる。体言化接尾辞を伴う場合、体言化接尾辞によって派生した後は体言の形態法を取る。

動詞は自動詞と他動詞に下位分類が可能であるが、形態法に違いは見られない。例えば-*ni* (一人称単数主語) や-*chi* (使役化) など、自動詞 *puri* 「歩く」に接続しうる接尾辞は、他動詞 *qawa* 「見る」にも同じ形態で接続しうる。

体言は代名詞の一部を除き、自由形態素である。体言は動詞と異なり、*misi* 「猫」、*atuq* 「キツネ」のように母音と子音のどちらも語末に現れうる。体言は文中の主語として現れる場合か、体言化従属節内の目的語として現れる場合か、他の体言を修飾する場合に、接尾辞を伴わず現れうる。それ以外の場合、その節で示される出来事における役割に応じた格接尾辞を伴う。

体言の下位分類として、他の体言を修飾する体言はしばしば形容詞と呼ばれ、主に動詞の項として機能する名詞と区別される。ただし、形容詞と名詞は語彙的には区別されず、ある体言が形容詞であるか名詞であるかは実例内でしか判断不可能である。例えば体言 *uchuy* は「小さい」として *uchuy wasi* 「小さい家」のように他の体言を修飾する場合もあれば、*uchuy-ta* 「小さいものを」のように格接尾辞 (ここでは対格-*ta*) を伴い動詞の項として機能する場合もある。同様に体言 *rumi* は「石」として *rumi-ta* 「石を」のように格接尾辞を伴い動詞の項として機能する場合もあれば、*rumi wasi* 「石づくりの家」(*wasi* 「家」) のように他の体言を修飾することもある。

動詞と体言は、屈折が起きる品詞である。一方、不変化詞は屈折が起きない語根である。不変化詞は接尾辞¹⁰を伴わず現れる。不変化詞には副詞 *kunan* 「今日、今」や接続詞 *icha* 「または」のような自由形態素のほか、主題標示の接語=*qa* のような拘束形態素も含まれる。

以上の記述を踏まえ、本稿では用言・体言・不変化詞の3カテゴリーをアヤクーチョ方言の基本的な品詞分類とする。アヤクーチョ方言の主要な品詞分類とその下位分類、主要な屈折・派生のカテゴリーおよび具体的な接尾辞の例は、表8のように整理できる。

⁹ アヤクーチョ方言 (Parker 1969, Zariquiey and Córdova 2008)、タルマ方言 (Adelaar 1977)、ワリヤガ方言 (Weber 1989)、ヤウヨス方言 (Shimelman 2017)。

¹⁰ 主題標示 *qa* や焦点標示 *m(i)* や *s(i)*、とりたてや語調を標示する *lla* などは、前接する形態素の品詞を問わない拘束形態素であり、接語 (enclitics) または文接尾辞 (sufijo oracional; Zariquiey and Córdova 2008) と呼ばれる。不変化詞はこれらの形態素のみが接続する品詞である。これらの形態素を接語と接尾辞のいずれと分類すべきかにはより詳細な分析の余地があるものの、本稿では接続する品詞を限定しない点に着目し、接語として分析する。

表 8. アヤクーチョ方言の基本的な品詞分類

| 品詞名 | 主要な下位分類 | 主な屈折・派生のカテゴリー | 具体的な接尾辞の例 | | |
|-----|---------|---------------|---|------|--|
| 体言 | 名詞 | 格 | - <i>ta</i> (対格)、- <i>man</i> (与格)、- <i>pa</i> (属格) | | |
| | | 所有者 | - <i>y</i> (一人称単数)、- <i>yki</i> (二人称単数)、- <i>n</i> (三人称単数) | | |
| | | 数 | - <i>kuna</i> | | |
| | | 指小辞・指大辞 | - <i>cha</i> 、- <i>su</i> | | |
| | | 体言化 | - <i>yuq</i> 、- <i>sapa</i> | | |
| | | 動詞派生 | - <i>ya</i> 、- <i>cha</i> | | |
| 用言 | 動詞 | 主語・目的語の人称・数 | - <i>ni</i> (一人称単数)、- <i>nki</i> (二人称単数)、- <i>n</i> (三人称単数) | | |
| | | テンス | - <i>ru</i> (過去) | | |
| | | アスペクト | - <i>chka</i> (進行) | | |
| | | ヴォイス | - <i>chi</i> (使役)、- <i>ku</i> (再帰) | | |
| | | 動作の方向 | - <i>yku</i> 、- <i>mu</i> | | |
| | | 交替指示 | - <i>spa</i> 、- <i>stin</i> 、- <i>pti</i> | | |
| | | 体言化 | - <i>y</i> 、- <i>q</i> 、- <i>sqa</i> 、- <i>na</i> | | |
| | | 不変化詞 | 副詞 接続詞 小辞 | (無し) | |
| | | | | (無し) | |
| | | | | (無し) | |

用言は体言と対立するカテゴリーであり、動詞つまり屈折の起きる拘束形態素語根を下位カテゴリーとする。体言と不変化詞の分類基準は従来記述に従い、屈折の起きる自由形態素語根を体言、屈折の起きない語根を不変化詞と呼ぶ。

先行研究においては、両義詞 (ambivalent; Parker 1969, Shimelman 2017) が独立の品詞カテゴリーとして設けられる場合がある。両義詞は動詞としても体言としても機能しうる語根である。例えば *para* は *para-chka-n* (雨が降る-PROG-3SG) 「雨が降っている」のように動詞形態法を取り、動詞「雨が降る」として機能しうる。この *para* は *para-rayku* (雨-CSL) 「雨のせいで」のように体言形態法を取り、体言「雨」としても機能しうる。両義詞が動詞と体言のどちらとして機能するかは、実例内でのみ判断可能である。

両義詞はケチュア語の語彙研究においては重要な分析であるが、本稿では品詞分類としては採用しない。その理由は以下の3点である。(i) 両義詞は固有の形態法を持たない。両義詞は用言または体言のいずれかの形態法のみを取り、用言にも体言にも適用されない形態法を取ったり、体言化などの品詞変化派生無しに用言の形態法と体言の形態法が同時に現れたりすることも無い。(ii) アヤクーチョ方言において複数のクラスの形態法を取りうる形態は、*para* のように用言と体言の形態法を取るものに限られない。例えば *kunan* 「今日、今」をはじめとする時間を表す形態や *hina* 「～のような(不変化詞)」「～のようである(動詞)」のように、不変化詞または体言の形態法を取る形態、不変化詞または用言の形態法を取る形態も存在する。従来両義詞の定義では *kunan* や *hina* のような形態が分類不可能である。(iii) 単一の形態が複数のクラスの形態法を取る現象は、英語や日本語をはじめ通言語的によく見られる現象であり、アヤクーチョ方言において特筆に値する特徴ではない。よって、アヤクーチョ方言の形態法に着目する本稿において、両義詞を独立の品詞カテゴリーとするメリットは少ないと筆者は考える。

このような前提の元、以下ではアヤクーチョ方言の体言形態法と動詞形態法を概観する。従来両義詞として分類された形態は、ゼロ派生による体言と用言の別の形態素と分析する。

3.2. 体言形態法

アヤクーチョ方言の体言は、一部の例外を除き格と所有者の人称・数を義務的に標示する。これらの義務的な標示の他には、指示対象の数、指小辞をはじめとする派生が随意的に標示される。以下ではアヤクーチョ方言の体言形態法を、格標示 (3.2.1)、所有者の人称・数標示 (3.2.2)、数標示 (3.2.3)、派生標示 (3.2.4) の3点から記述する。

3.2.1. 格標示

体言の形態法で最も代表的なものは格標示である。体言には、その指示対象が果たす意味役割によって異なる格接尾辞が接続する。体言が明示的な形態を持つ格接尾辞を伴わないのは、(a) 節の主語として機能する場合、(b) 体言化従属節内の目的語として機能する場合の一部 (第4.3.2.2 節参照)、(c) 他の体言を修飾する場合である。

研究者によって分析が異なるものの、アヤクーチョ方言では10前後の接尾辞が格標示として機能する。表9はアヤクーチョ方言が持つ格標示の一覧¹¹である。

表9. アヤクーチョ方言の格標示

| 格のラベル | 格接尾辞 | 標示する主な機能 |
|-------|----------------------|------------------|
| 主格 | - \emptyset (形態無し) | 主語 |
| 対格 | - <i>ta</i> | 直接目的語、移動の通路 |
| 与格 | - <i>man</i> | 間接目的語、移動の目的地 |
| 奪格 | - <i>manta</i> | 移動の起点 |
| 所格 | - <i>pi</i> | 動作の行われる場所 |
| 属格 | - <i>pa</i> | 所有者 |
| 共格 | - <i>wan</i> | 行為の随伴者、道具 |
| 受益者格 | - <i>paq</i> | 行為の目的、行為の受益者 |
| 原因格 | - <i>rayku</i> | 行為の原因 |
| 限界格 | - <i>kama</i> | 移動の限界点、通路 |
| 集団格 | - <i>pura</i> | 相互行為を行う集団 |
| 分配格 | - <i>nka</i> | 授受行為における1人当たりの個数 |

このうち主格- \emptyset 、対格-*ta*、与格-*man*は、それぞれ主語、直接目的語、間接目的語を標示する。(8)、(9)、(10)は、それぞれ自動詞文、他動詞文、複他動詞文における格標示の例である。

(8) *Juana*- \emptyset *wasi-n-pi*=*m* *puñu-chka-n*.

ファナ-NOM 家-3SG.POSS-LOC=FOC 歩く-PROG-3SG

「ファナが自分の家で寝ている」(Zariquiey and Córdova 2008: 94)

¹¹ この格接尾辞の一覧は、Parker (1969: 39-43) が挙げる格接尾辞の一覧に主格を加えたものである。

(9) *ñuqa-ø carro-ta=m riku-chka-ni.*

私-NOM 車-ACC=FOC 見る-PROG-1SG

「私は車を見ている」(Zariquiey and Córdova 2008: 95)

(10) *ñuqa-ø Maria-man chocolate-ta=m qu-ni.*

私-NOM マリア-DAT チョコレート-ACC=FOC 与える-1SG

「私はマリアにチョコレートあげる」(Zariquiey and Córdova 2008: 94)

このような必須項の機能を標示する文法格の他、付加詞の機能を標示する意味格がアヤクーチョ方言には数多く見られる。(11)(12)は、アヤクーチョ方言における付加詞の格標示の例である。

(11) *huk qari=m palmera-pa waqta-n-pi muyu-chka-n.*

1.NUM 男=FOC ヤシ-GEN そば-3SG.POSS-LOC 回る-PROG-3SG

「ある男がヤシのそばで回っている」(筆者のフィールドワークより)

(12) *ñuqa tanta-ta=m ranti-chka-ni Juana-paq*

私 パン-ACC=FOC 買う-PROG-1SG ファナ-BEN

「私はファナのためにパンを買います」(Zariquiey and Córdova 2008: 96)

(11)では行為の行われる場所となる付加詞 *palmera-pa waqta* 「ヤシのそば」が所格-*pi* で標示されており、(12)では行為の受益者となる付加詞 *Juana* 「ファナ」が受益者格-*paq* で標示されている。このように、アヤクーチョ方言は豊富な接尾辞で文法格および意味格を標示する。

アヤクーチョ方言の格標示は動詞の項または付加詞の機能を標示するだけでなく、体言修飾に用いられる場合もある。体言修飾に用いられる代表的な格標示は属格-*pa* である。属格-*pa* は、主に所有者を標示する。(13)は属格による所有者標示の例である。

(13) *mama-y-pa suti-n Aurora=m.*

母-1SG.POSS-GEN 名前-3SG.POSS アウロラ=FOC

「私の母の名前はアウロラです」(Zariquiey and Córdova 2008: 45)

(13)では、*suti* 「名前」の所有者である *mama-y* 「私の母」が属格-*pa* で標示されている。そして、属格で標示された所有者 *mama-y-pa* 「私の母の」が *suti* を修飾している。

動詞の項・付加詞の標示と体言修飾の標示のどちらにも用いられる格接尾辞も存在する。例えば奪格-*manta* は、移動の起点を表す付加詞だけでなく、材料を表す体言修飾を標示する場合もある。(14a)、(14b)はそれぞれ、-*manta* が移動の起点を表す付加詞と材料を表す体言修飾を標示する例である。

(14) a. *amiga-y pabellon-man yayku-ru-n kay-manta.*

友達(女)-1SG.POSS 建物-DAT 入る-PST-3SG これ-ABL

「私の友達がここから建物へ入った」(筆者のフィールドワークより)

b. *kaspi-manta tiyana*

木-ABL 椅子

「木でできた椅子」(Zariquiey and Córdova 2008: 97)

(14a) では移動の起点となる付加詞 *kay* 「これ、ここ」が奪格-*manta* で標示されている。一方 (14b) では、*tiyana* 「椅子」の材料となる *kaspi* 「木」が *manta* で標示され、*kaspi-manta* が *tiyana* を修飾している。

アヤクーチョ方言では、格標示の連続が見られる。例えば、(15) は属格-*pa* に奪格-*manta* が後続する例である。

(15) *ñuqa-pa-manta ri-n.*

私-GEN-ABL 行く-3SG

「彼/彼女/それは私の(ところ)から行きます」(Parker 1969: 44)

(15) では、属格で標示された *ñuqa-pa* 「私の」が被修飾句を伴わず「私のもの、ところ」を表す体言として機能しており、これに奪格接尾辞が接続している。このように、格標示によって体言修飾として機能する体言が、修飾される体言無しに項や付加詞として機能することで、格標示が連続する場合がある。

体言修飾を表さない格標示が連続する例も見られる。(16) は、体言修飾を表さない格接尾辞である対格-*ta* と限界格-*kama* が連続する例である。

(16) *ñan-ta-kama=m huk warmi ri-chka-n*

道-ACC-LIM=FOC 1.NUM 女 行く-PROG-3SG

「ある女の人が道に行く」(筆者のフィールドワークより)

(16) では、対格-*ta* の後ろに限界格-*kama* が接続している。アヤクーチョ方言ではこのように、体言修飾を表さない格接尾辞も連続しうる。

(16) のような体言修飾を表さない格接尾辞の連続は随意的である。(17a)、(17b) はそれぞれ、(16) と同様に移動の通路を表す体言に対し、対格または限界格が単独で用いられる例である。

(17) a. *huk warmi puri-chka-n carretera-n-ta*

1 女 歩く-PROG-3SG 道-3SG.POSS-ACC

「ある女の人が道を歩いている」(筆者のフィールドワークより)

b. *warmi=m puri-chka-n carretera-n-kama*

女=FOC 歩く-PROG-3SG 道-3SG.POSS-LIM

「女の人が道を歩いている」(筆者のフィールドワークより)

(16)、(17a)、(17b) はいずれも道を歩くという事象を表現した発話であり、-*ta-kama*、-*ta*、-*kama* は全て移動の通路である *ñan* 「道」または *carretera* 「道」を標示している。よって、(16) にお

ける格標示の連続は義務的なものではなく、対格単独、限界格単独でも移動の通路を標示できる。このように、アヤクーチョ方言には随意的な格標示の連続も見られる。

3.2.2. 所有者の人称・数標示

アヤクーチョ方言の体言は、格の他にも所有者の人称・数によって屈折する。所有者の人称・数を表す接尾辞の一覧は表 10 の通りである。

表 10. アヤクーチョ方言の所有人称接尾辞

| | 単数 | 複数 |
|-----|------|----------------------------|
| 一人称 | -y | -yku (除外形) -nchik (包括形) |
| 二人称 | -yki | -ykichik |
| 三人称 | -n | -nku |

アヤクーチョ方言の一人称複数は、聞き手を含む包括形と聞き手を含まない除外形の区別を持つ。一人称複数の包括形と除外形の区別は、動詞の一致にも見られる (3.3 参照)。さらに表 10 が示す人稱・数標示は、体言化においては体言化を受ける動詞の主語の人稱・数を標示する (第 3.3.7 節参照)。

所有者が属格で明示される場合、所有者の人稱・数の標示は義務的である。(18) で示すように、所有者の人稱・数標示を省略することはできない。

(18) *Carlos-pa wasi*(-n).*

カルロス-GEN 家-3SG.POSS

「カルロスの家」(Zariquiey and Córdova 2008: 94)

ただし、属格を用いない体言修飾で所有関係を示す場合、所有者の人稱・数標示は随意的である。この現象は *uku* 「下、中」や *hawa* 「上、外」などの位置名詞が別の名詞によって修飾される場合に起きる。(19a) (19b) は、位置名詞が属格を用いない体言修飾を受ける例である。

(19) a. *pelota-ta hayta-chka-n huk runa wasi uku-n-man*

ボール-ACC 蹴る-PROG-3SG 1 男 家 中-3SG.POSS-DAT

「ある男性がボールを家の中へ蹴っている」(筆者のフィールドワークより)

b. *huk runa=m hayta-ru-n pelota-n-ta wasi uku-man*

1 男=FOC 蹴る-PST-3SG ボール-3SG.POSS-ACC 家 中-DAT

「ある男性がボールを家の中へ蹴った」(筆者のフィールドワークより)

(19a) および (19b) では、*wasi* 「家」が位置名詞 *uku* 「中、下」を属格で標示されること無く修飾している。この場合、*wasi* の人稱・数に対応する所有人称接尾辞を (19a) のように *uku* に接続しても、(19b) のように省略しても文法的に適格である。このように、所有者が属格で標示されていない場合は、所有者の人稱・数の標示が随意的になる。

3.2.3. 数標示

体言の数は単数と複数で区別される。複数は*-kuna*で標示される。例えば*runa*「人」が単数を表すのに対し、*runa-kuna*「人々」は複数を表す。

*-kuna*による複数標示は義務的ではない(Parker 1969: 39)。意味的には複数の指示対象が形態的には*-kuna*を伴わず現れる場合もある。(20)は複数の指示対象を表す体言が明示的な複数標示無しで現れる例である。

(20) *Visperas San Juan-pi=m llapa dueño, pito-wan tambor-wan=pas,*
 聖ヨハネの前夜祭-LOC=FOC 全ての 主人 ホイッスル-COM 太鼓-COM=も
musica-pi qunuku-nku.

音楽-LOC かがり火を燃やす-3PL

「聖ヨハネの前夜祭では、全ての人がホイッスルや太鼓で音楽を奏でながらかがり火を燃やします」(Zariquiey and Córdova 2008: 123)

(20)では主語の*llapa dueño*が無標つまり単数の形態で現れている一方、動詞には三人称複数主語を表す*-nku*が接続している。このように、アヤクーチョ方言における体言の単複標示は随意的である。

3.2.4. 体言派生接尾辞

アヤクーチョ方言は、体言を派生させる様々な接尾辞を持つ。代表的には、表11のような接尾辞が体言を語基とする派生に用いられる。

表 11. アヤクーチョ方言の体言派生接尾辞

| 形態素 | 派生後の品詞 | 機能 |
|---------------------------|--------|-------------------|
| <i>-cha</i> | 体言 | 指小辞 |
| <i>-su</i> | 体言 | 指大辞 |
| <i>-yuq</i> | 体言 | 所有者体言派生 |
| <i>-sapa</i> | 体言 | 所有者体言派生、「～を豊富に持つ」 |
| <i>-ya</i> | 用言 | 「～化する」 |
| <i>-cha</i> ¹² | 用言 | 「～を作る」「～を除く」 |

アヤクーチョ方言の体言派生接尾辞には、指小辞*-cha*「小さな～」、指大辞*-su*「大きな～」のように語基の指示対象に特殊な意味を添加する接尾辞と、所有者体言化*-yuq*「～を持つ人、物」、*-sapa*「～を豊富に持つ人、物」のように語基の指示対象と関係する概念を派生する接尾辞と、*-ya*「～化する」、*-cha*「～を作る、除く」のように語基の指示対象と関係する動詞を派生する接尾辞が見られる。

¹² 指小辞*-cha*と同形であるが異なる接尾辞である。

-*cha* は指小辞 (diminutive) である。*wasi* 「家」や *warmi* 「女性」などの一般名詞のほか *Ursula* 「ウルスラ (女性名)」のような固有名詞にも接続し、*wasi-cha* 「小さな家」、*warmi-cha* 「背の低い女性、女の子」、*Ursula-cha* 「ウルスラさん、ウルスラちゃん」のように接続した体言が指す指示対象の小ささ、幼さ、親しみなどを表現する。*-cha* は、丁寧かつ親しみのある呼びかけで多用される (Parker 1969: 60)。*-cha* と対称的な接尾辞に指大辞 (augmentative) *-su* があり、*allqu* 「犬」に対する *allqu-su* 「大きな犬」のように物理的な大きさや性質の大きさを表す。この *-su* と *-cha* は共起不可能である (Parker 1969: 60)。

-yuq は所有者体言化を表し、語基の指示対象を所有する人や物を表す体言を派生する。例えば *wasi* 「家」に *-yuq* が接続した *wasi-yuq* 「家持ち」は、家を持つ人や物を指す体言として用いられる。類似した機能を持つ接尾辞には *-sapa* があり、*wasi* 「家」に対する *wasi-sapa* 「家をたくさん持つ (人や物)」や *ñawi* 「目」に対する *ñawi-sapa* 「大きな目を持つ (人や物)」のように、語基が指す指示対象を持ち、かつその指示対象の量や規模が大きい人や物を指す体言を派生する。このように、接続した体言からメトニミー的に想起される、モノ的な概念を指す語を派生するという点で、*-yuq* や *-sapa* は体言を元にする体言化 (Shibatani 2019) を表す接尾辞と言える。

-ya は「語基の表す状態になる」という意味の動詞を派生する。(21) は接尾辞 *-ya* による派生の例である。

- (21) ... *sunqu-n=si* *iskay-ya-n*.
 ... 心臓-3SG.POSS=FOC.HYS 2.NUM-VBLZ-3SG
 「彼の心臓が2つになる (=とても疲れている)」 (Parker 1969: 35)

(21) では、体言の1つである数詞 *iskay* 「2」に *-ya* が接続し、*iskay-ya* 「2つになる」という動詞を派生している。同様の機能を持つ接尾辞に *-cha* があり、*wasi* 「家」から *wasi-cha* 「家を建てる」、*qura* 「草」から *qura-cha* 「雑草を抜く」のように語基の指示対象の作成あるいは破壊・除去を表す動詞を派生する。

3.3. 用言形態法

アヤクーチョ方言は豊富な動詞接尾辞を持つ言語である。主語や目的語の人称や数 (3.3.1)、テンス (3.3.2)、アスペクト (3.3.3)、ヴォイス (3.3.4) は、動詞接尾辞として標示される。さらに、移動や動作の方向を表す方向接尾辞 (3.3.5) や交替標識 (3.3.6)、体言化接尾辞 (3.3.7) など、類型論的に興味深い特徴を持った動詞接尾辞も見られる。本節では、これらの接尾辞による用言形態法を総覧する。

3.3.1. 人称・数標示

アヤクーチョ方言の動詞には、主語と目的語の人称・数が標示される。本節における主語とは自動詞文の必須項および他動詞文においてより能動的な役割を果たす項を指す。本稿に

おける目的語とは、他動詞文においてより被動的な役割を果たす項を指す(第 4.1 節参照)。主語・目的語の人称・数標示は、未来時制の場合に時制標示とのかばん形態素となる(第 3.3.2 節参照)。

主語と目的語の人称・数標示は、過去時制標示-*r(q)a*、-*s(q)a* など一部の接尾辞を伴う場合を除き、義務的に現れる。表 12 は、自動詞文かつ現在時制の場合に動詞に接続する主語の一致標示の一覧である。

表 12. アヤクーチョ方言の主語の人称・数標示

| | 単数 | 複数 |
|-----|--------------|---|
| 一人称 | - <i>ni</i> | - <i>ni-ku</i> (除外形) - <i>n-chik</i> (包括形) |
| 二人称 | - <i>nki</i> | - <i>nki-chik</i> |
| 三人称 | - <i>n</i> | - <i>n-ku</i> |

体言の所有者標示と同様に(第 3.2.2 節参照)、一人称複数は聞き手を含む包括形と聞き手を含まない除外形の区別を持つ。

アヤクーチョ方言における主語の人称・数標示は、-*ni*、-*nki*、-*n* からなる人称を表す要素と、-*ku*、-*chik* からなる数を表す要素に分析できる。本稿では前者を人称標示、後者を数標示と呼ぶ。三人称の人称標示である-*n* は、過去時制の標示がある場合省略され得る。

アヤクーチョ方言において、複数の一致標示は随意的である(Parker 1969: 39)。(22) は明示的な複数標示を受けている主語に対し、単数の主語一致標示が用いられる例である。

(22) *chay llaqta-pi wasi-kuna=lla ka-n.*

それ 町-LOC 家-PL=のみ COP-3SG

「その町には家ばかりある」(Zariquiey and Córdova 2008: 184; 形態素分析とグロス は筆者による)

(22) では主語の *wasi-kuna=lla* は-*kuna* によって明示的に複数が標示されている。一方動詞 *ka* 「～である」に接続している主語一致標示は、三人称単数を表す-*n* となっている。

主語の人称・数標示は、どのテンス・アスペクトでも一貫して表 12 に示す体系を取る一方、ムードによっては異なる体系を取る。例えば命令法のパラダイムにおいて一人称主語は存在せず、二人称単数、二人称複数、三人称単数、三人称複数が区別される。

表 13. 命令のムードにおける主語の人称・数標示

| | 単数 | 複数 |
|-----|---------------|------------------|
| 一人称 | - | -(除外形) -(包括形) |
| 二人称 | - <i>y</i> | - <i>y-chik</i> |
| 三人称 | - <i>chun</i> | - <i>chun-ku</i> |

命令法のうち三人称への命令は、「(三人称の指示対象に)～させろ」という間接命令の意味を

を表す (Zariquiey and Córdova 2008: 168–169)。

さらに、勧誘法は他のモードと異なり、主語が話し手と聞き手の 2 人だけか、話し手と聞き手を含む 3 人以上かを区別する (Zariquiey and Córdova 2008: 169)。

表 14. 勧誘のモードにおける主語の人称・数標示

| 主語の人称・数 | 標示 |
|------------------|-----------|
| 話し手と聞き手の 2 人 | -sun |
| 話し手と聞き手を含む 3 人以上 | -sun-chik |

-sun および-sunchik は、未来時制における主語の人称・数標示のうち一人称複数包括形と形態的に共通している (第 3.3.2 節参照)。未来時制標示としての-sun と-sun-chik の使い分けは自由変異とされている (Soto Ruiz 1976: 93–94) が、勧誘のモードとしては最小形 (minimal) と拡大形 (augmented) を形態的に区別すると言える。

他動詞文においては、主語と目的語の人称・数の組み合わせに応じた標識が動詞に現れる。表 15 は、Parker (1969: 27) および筆者の聞き取り調査¹³に基づく主語・目的語の人称・数ごとの一致標識の一覧である。

表 15. アヤクーチョ方言の主語・目的語の人称・数標識 (Parker 1969: 27)

| | 一単 | 一複 (除) | 目的語の人称・数 | | 三単 | 三複 | | |
|------|--------|--------------|--------------|------------|-----------|--------------|-----------|-------|
| | | | 一複 (包) | 二単 | | | 二複 | |
| 主語の | 一単 | - | - | -yki | -yki-chik | -ni | -ni | |
| 人称・数 | 一複 (除) | - | - | -yki-ku | -yki-chik | -ni-ku | -ni-ku | |
| | 一複 (包) | - | - | - | - | -n-chik | -n-chik | |
| | 二単 | -wa-nki | -wa-nki-ku | - | - | -nki | -nki | |
| | 二複 | -wa-nki-chik | -wa-nki-chik | - | - | -nki-chik | -nki-chik | |
| | 三単 | -wa-n | -wa-n-ku | -wa-n-chik | -su-nki | -su-nki-chik | -n | -n |
| | 三複 | -wa-n | -wa-n-ku | -wa-n-chik | -su-nki | -su-nki-chik | -n-ku | -n-ku |

アヤクーチョ方言の他動詞文における人称・数標示は、自動詞文の主語人称・数標示における人称標示と数標示に加え、-wa (一人称目的語)、-yki (一人称主語・二人称目的語)、-su (三人称主語・二人称目的語) のように主語と目的語の人称の組み合わせを標示する要素の 3 つの要素に分析可能である。

他動詞文における人称標示および数標示は、主語に一致する場合もあれば目的語に一致する場合もある。例えば人称標示について、二人称単数主語・一人称単数目的語を標示する-wa-nki では-nki が主語の人称に一致している一方、三人称単数主語・二人称単数目的語を標示する-su-nki では-nki が目的語の人称に一致している。数標示について、一人称複数 (除外形) 主語・二人称単数目的語を標示する-yki-ku では-ku が主語の数に一致している一方、二人称単数主語・一人称複数 (除外形) 目的語を標示する-wa-nki-ku では-ku が目的語の数に一致している。

他動詞文におけるアヤクーチョ方言の人称・数標識のうち、数標示の出現には調査ごとにゆれが見られる。表 16 は、Zariquiey and Córdova (2008: 167–168) に基づく主語・目的語の人称・数ごとの一致標識の一覧である¹⁴。

¹³ この 2 つの調査結果は一致している。

¹⁴ Zariquiey and Córdova (2008: 167–168) では他動詞文における主語と目的語の人称・数標示について、一人称複数目的語の除外形と包括形を区別していない。表 16 では、(a) 一人称または二人称主語・一

表 16. アヤクーチヨ方言の主語・目的語の人称・数標識 (Zariquiey and Córdova 2008: 167–168)

| | 目的語の人称・数 | | | | | | |
|-------------|--------------------|-----------------------|---------------|--------------|-----------------|-----------|-----------|
| | 一単 | 一複(除) | 一複(包) | 二単 | 二複 | 三単 | 三複 |
| 一単 | – | – | – | -yki | -yki-chik | -ni | -ni |
| 一複(除) | – | – | – | -yki-ku | -yki-chik-ku | -ni-ku | -ni-ku |
| 一複(包) | – | – | – | – | – | -n-chik | -n-chik |
| 主語の 人称・数 | 二単 -wa-nki | 二単 -wa-nki-ku | – | – | – | -nki | -nki |
| | 二複 -wa-nki-chik | 二複 -wa-nki-chik-ku | – | – | – | -nki-chik | -nki-chik |
| | 三単 -wa-n | 三単 -wa-n-chik | -wa-n-chik | -su-nki | -su-nki-ku | -n | -n |
| | 三複 -wa-n-ku | 三複 -wa-n-chik-ku | -wa-n-chik-ku | -su-nki-chik | -su-nki-chik-ku | -n-ku | -n-ku |

表 16 に示す人称・数標識のパラダイム (Zariquiey and Córdova 2008: 167–168) は、表 15 に示すパラダイム (Parker 1969: 27) と比べて *-chik* および *-ku* の出現パターンが異なっている。さらに前者には、後者には見られない *-chik* と *-ku* の連続が見られる。このように主語または目的語の数を標示する部分にゆれが見られるのは、この言語における単数・複数の標示と一致の随意性 (第 3.2.3 節参照) と関連することが示唆される。

人称階層標示と人称標示・数標示は、一部の接尾辞によって分離される。(23) は、人称階層標示と人称標示がアスペクトの標示によって分離される例である。

- (23) *wasi hawa-n-manta qawa-mu-wa-chka-n.*
 家 外-3SG.POSS-ABL 見る-VEN-1.OBJ-PROG-3SG.SBJ.1SG.OBJ
 「(彼/彼女は)家の外から私を見ている」(筆者のフィールドワークより)

(23) では、主語・目的語の一致標識における人称階層標示の *-wa* と人称標示の *-n* が、進行のアスペクトを示す *-chka* によって分離されている。人称標示と数標示の間に出現する接尾辞は存在しない。

人称階層標示は、直接目的語以外の項の人称・数を反映する場合もある。例えば、移動の目的地が「私」や「あなた」に関連する場所である場合、直接目的語が一人称や二人称以外であっても目的語の一致標示が現れる。(24) は、直接目的語が三人称であるにもかかわらず一人称や二人称目的語の一致標示が現れる例である。

- (24) *ñuqa-pa lado-y-man apa-ra-mu-wa-n silla-ta.*
 私-GEN そば-1SG.POSS-DAT 運ぶ-PST-VEN-1.OBJ-3SG.SBJ 椅子-ACC
 「私のそばに椅子を持ってきた」(筆者のフィールドワークより)

(24) における動詞 *apa* 「持つ、運ぶ」の直接目的語は対格 *-ta* で標示される *silla* 「椅子」であり、三人称単数である。したがって、(24) に現れる *-wa* は直接目的語の人称・数の標示ではない。さらに与格で標示される *ñuqa-pa lado-y* 「私のそば」は三人称単数であり、動詞 *apa* に対しては省略可能な付加詞である。このように、動詞の一致標示は、直接目的語やその他の項・

人称複数(包括形)目的語の組み合わせは、主語と目的語と同じ指示対象を含むため許容されない、(b) 三人称主語の場合、一人称複数目的語が除外形と包括形の場合で同様の形態を取ると推測して表記している。

付加詞が直接示す人称・数だけでなく、これらの項・付加詞と意味的に関連する指示対象の人称・数を標示する場合もある。

3.3.2. テンス

アヤクーチョ方言は、現在・過去・未来の3つのテンスを用言形態法によって区別する。(25) (26) (27) はそれぞれ現在、過去、未来のテンスを示す例文である。

(25) *ñuqa tiya-ni.*

私 座る・住む-1SG

「私は住む」(Zariquiey and Córdova 2008: 83)

(26) *ñuqa tiya-rqa-ni.*

私 座る・住む-PST-1SG

「私は住んだ」(Zariquiey and Córdova 2008: 162)

(27) *ñuqa apa-saq.*

私 持っていく-FUT.1SG

「私は持っていくだろう」(Zariquiey and Córdova 2008: 225)

(25) で示すように、現在時制は無標であり、明示的な形態で標示されない。過去時制は (26) における *-r(q)a* のようにテンスを示す接尾辞で標示される。未来時制は (27) における *-saq* のように、テンスと主語や目的語の人称を同時に表す接尾辞で標示される。

過去時制の標示は、証拠性によって (26) のような直接経験の過去 *-r(q)a* および *-r(q)u*¹⁵ と、伝聞の過去 *-s(q)a*¹⁶ が区別される。(28) は伝聞過去の例である。

(28) *huk siñora=s, huk warma-ta uywa-sqa wasi-n-pi...*

1.NUM 女=FOC.HYS 1.NUM 少年-ACC 育てる-PST.HYS 家-3SG.POSS-LOC

「ある女の人が、自分の家である少年を育てていたような、……」(Parker 1963: 19)

(28) では動詞 *uywa* 「育てる」に *-s(q)a* が接続し、過去時制かつ伝聞の証拠性を標示している。現在および未来時制にはこのような証拠性の区別は無い。

未来時制は、主語・目的語の人称・数とのかばん形態素で標示される。表 17 は、未来時制かつ目的語が三人称の場合の主語の人称・数標示の一覧である。

¹⁵ この *-r(q)u* は、外への移動や完了のアスペクトを表す動詞接尾辞の用法が過去時制の標示へ拡張したものと考えられる(第 3.3.5 節参照)。Parker (1969) や Zariquiey & Córdova (2008) では *-r(q)a* が過去時制の標示として記述されている。Parker (1965) などのアヤクーチョ方言のテキストでは過去の出来事を表現する際に *-r(q)a* が使われる一方、口語ではしばしば *-r(q)u* が用いられる。

¹⁶ *-r(q)u*、*-r(q)a*、*-s(q)a* とともに *q* は脱落しうる。*q* の有無に関する文法的条件は報告されておらず、個人差・世代差・レジスターの違いと相関する自由変異であると考えられる。

表 17. 動詞の主語を表す人称接尾辞：未来形

| | 単数 | 複数 |
|-----|--------------|--|
| 一人称 | - <i>saq</i> | - <i>saq-ku</i> (除外形) - <i>sun(-chik)</i> (包括形) |
| 二人称 | - <i>nki</i> | - <i>nki-chik</i> |
| 三人称 | - <i>nqa</i> | - <i>nqa-ku</i> |

このうち、一人称複数包括形の-*sun(chik)* は、勧誘のムードの標示としても用いられる。勧誘法の標示として用いる場合は、最小形-*sun* と拡大形-*sunchik* が区別される (第 3.3.1 節参照)。

3.3.3. アスペクト

アヤクーチョ方言において、固有の形態で明示的に動詞に標示されるアスペクトは進行のみである¹⁷。進行のアスペクトは-*chka* によって標示される。(29) は、-*chka* が進行のアスペクトを示す例である。

(29) *Maqta-kuna=qa toca-chka-nku=s.*

若者-PL=TOP 演奏する-PROG-3PL=FOC.HYS

「若者たちは演奏しているようだ」(Parker 1963: 49)

-*chka* は様々な動詞に生産的に接続し、語彙的に接続不可能な動詞は報告されていない。

-*chka* の他、移動の方向を表す動詞接尾辞 (第 3.3.5 節参照、以下方向接尾辞) がアスペクトを示す場合も指摘されている。例えば、アヤクーチョ方言において過去のテンスを表示する-*r(q)u* (第 3.3.2 節参照) は、歴史的には方向接尾辞の一つ (Kalt 2015) であり、完了の意味を表すことが指摘されている (Parker 1969: 67, Kalt 2015: 38–49)。さらに、移動の方向として「中へ」「下へ」を表す方向接尾辞-*yku* も、「完全に」という完了のアスペクトも表しうることが指摘されている (Kalt 2015: 38–49)。-*yku* は移動表現においても移動の方向のみならず移動の到達点の存在を示すことが指摘されており (Morokuma to appear)、空間における完了の意味が時間における完了の意味に拡張していると分析できる。

3.3.4. ヴォイス

アヤクーチョ方言における主要なヴォイス標示は使役-*chi* と再帰-*ku* である。(30) は、-*chi* が使役のヴォイスを標示する例である。

¹⁷ Parker (1969: 29–30) は-*n*、-*p*、-*s*、-*r* の 4 つをアスペクトの標示として挙げている。Parker (1969: 29–30) は過去時制標示-*rqa* や-*sqa*、従属節化標示-*sqa* などを-*rqa* と-*sqa* のように分析し、これらに共通する形態である-*n*、-*p*、-*s*、-*r* をアスペクト標示としている。しかし Parker (1969: 29–30) 自身はこれら 4 つの具体的な意味は「時制や従属節化と密接に結びついており、分析が難しい」として記述していない。Parker (1969) の指摘は重要なものであるが、それぞれが示すアスペクトが明確でないことから、本稿ではこれら 4 つをアスペクト標示としては扱わない。

(30) *Ñuqa=qa Pedro-man tusu-chi-ni.*

私=TOP ペドロ-DAT 踊る-CAUS-1SG

「私はペドロを躍らせた」(Zariquiey and Córdova 2008: 171)

(30) では、自動詞 *tusu* 「踊る」が *-chi* によって使役化されている。使役化によって使役者は主格で表示され、被使役者は与格で標示されている。被使役者は与格だけでなく、対格によっても標示されうる (Parker 1969: 67–68)。

他動詞も *-chi* によって使役化できる。(31) は他動詞が使役化される例である。

(31) *Ñuqa=qa wallpa-man sara-ta miku-chi-ni.*

私=TOP にわとり-DAT とうもろこし-ACC 食べる-CAUS-1SG

「私はにわとりとうもろこしを食べさせた」(Zariquiey and Córdova 2008: 171)

他動詞文では、主語が主格、目的語は対格で標示される(第 4.1 節参照)。他動詞を使役化した場合、使役者は主格、使役化する前の主語である被使役者は (31) のように与格のほか共格、目的語は対格で標示される。被使役者が与格と共格のいずれで標示されるかは、被使役者が受容者と行為者のどちらの役割を果たすかによる (Parker 1969: 68)。受容者となる被使役者は与格、行為者となる被使役者は共格で標示される。

アヤクーチョ方言は使役一般を表す *-chi* のほか、随伴使役 (sociative causation; Shibatani and Pardeshi 2002: 147–153) を標示する接尾辞 *-ysi* を持つ。(32) は *-ysi* が適用を標示する例である。

(32) *Ñuqa machula-ta puri-ysi-ni.*

私 おじいさん-ACC 歩く-CAUS.ASS-1SG

「私はおじいさんに連れ立って歩く(おじいさんが歩くのを助ける)」(Zariquiey and Córdova 2008: 173)

(32) では、*ñuqa* 「私」が *machula* 「おじいさん」と共に歩き、おじいさんの歩く行為を介助している随伴使役が *-ysi* によって示される。ここでは介助者である *ñuqa* 「私」が主格で標示され、被介助者である *machula* 「おじいさん」が対格で標示されている。一人称または二人称の指示対象が被介助者となる場合、*puñu* 「寝る」に対する *puñu-ra-ysi-sa-yki* (寝る-DIR.RQU-CAUS.ASS-FUT-1.SBJ.2.OBJ) 「私はあなたと共に寝る」のように被介助者の人称・数が目的語の人称・数として標示される (Parker 1969: 68)。

この *-ysi* の存在は通言語的に興味深い。他の使役からは独立して随伴使役を表す形態を持つ言語は通言語的に珍しく、南アメリカに集中的に分布することが指摘されている (Guillaume and Rose 2010: 390–391)¹⁸。

接尾辞 *-ku* は再帰を表す。(33) は *-ku* が再帰を標示する例である。

¹⁸ Guillaume and Rose (2010) では、アヤクーチョ方言と系統的に近いクスコ=コリヤ方言が同様の機能を持つ *-ysi* を持つことに言及している。

(33) *Qam espejo-pi qawa-ku-rqa-nki.*

2SG 鏡-LOC 見る-REFL-PST-2SG

「あなたは鏡越しに自分を見た」(Zariquiey and Córdova 2008: 171)

(33)では、動詞 *qawa* 「見る」に *-ku* が接続し、見る行為における行為者が被行為者を兼ねることを表している。

アヤクーチョ方言は、受動のヴォイスを明示的に標示する単一の形態を持たない。受動は使役 *-chi* と再帰 *-ku* を組み合わせて表現される場合がある。(34) は使役 *-chi* と再帰 *-ku* の組み合わせが受動のヴォイスを標示する例である。

(34) *uyari-y-ni-ki-ta-wan-puni pawa-mu-nki mana*

聞く-NMLZ.INF-EUPH-2SG-COM-EMPH 飛ぶ-VEN-2SG NEG

musya-chi-ku-spa-yki

知覚する-CAUS-REFL-SR.SS-2SG

「あなたは(扉を叩くのを)聞いたら、気づかれないように飛び出してきた」(Parker 1963: 37)

(34)では、*musya* 「知覚する」に *-chi* と *-ku* が接続し、「知覚される、気づかれる」という意味を表現している。この文脈において知覚する行為の主体は第三者、対象は聞き手である。動詞句 *musya-chi-ku-spa-yki* における人称標示 *-yki* は主語が二人称単数、目的語が無しまたは三人称であることを表す(第 3.3.7 節参照)¹⁹ ため、ここでは被動作主である聞き手が文法的には主語として標示されている。したがって、(34)においては *-chi* と *-ku* の連続が受動のヴォイスを表現している。

アヤクーチョ方言は、使役と再帰の他、適用 (applicative) を表す動詞接尾辞を持つ。 *-pu* は受益者を導入する適用標示である。(35) は *-pu* が適用を標示する例である。

(35) *Juan huk chocolate-ta Maria-man/-ta ranti-pu-rqa-n.*

ファン 1.NUM チョコレート-ACC マリア-DAT/-ACC 買う-APPL.BEN-PST-3SG

「ファンはマリアのためにチョコレートを買った」(Zariquiey and Córdova 2008: 172)

(35)では、ファンがマリアの利益となるように、あるいはマリアの代理でチョコレートを買ったことが *-pu* によって示されている。ここでは行為者であるファンが主格で標示され、受益者であるマリアが与格あるいは対格で標示されている²⁰。一人称または二人称の指示対象が受益者となる場合、*-ysi* における被介助者と同様に受益者の人称・数が目的語の人称・数として標示される (Parker 1969: 71)。このように *-pu* は、受益者を目的語あるいは斜格項として導入する適用を標示する。

¹⁹ 主語が三人称、二人称単数が目的語の場合も同様の形態を含むが、その場合はさらに *-su* (第 3.3.1 節参照) が添加される。

²⁰ 使い分けの条件は Zariquiey and Córdova (2008: 172) では明示されていない。Parker (1969: 71) では、*-pu* で導入される受益者は受益者格 *-paq* で標示されると記述されている。

3.3.5. 方向接尾辞

アヤクーチョ方言は、ケチュア語文法研究において方向接辞あるいは方向接尾辞 (directional affix, suffix) と呼ばれるいくつかの接尾辞を持つ。方向接尾辞は、動詞に接続し主に行為の方向を示す接尾辞である。何を方向接尾辞と分類するかは研究者によって異なるものの、表 18 に挙げる接尾辞がケチュア語諸変種における方向接尾辞として言及されている。

表 18. ケチュア語諸方言で見られる方向接尾辞

| 形態 | 意味 | 方向接尾辞として挙げている研究 |
|----------------------------|---------|---|
| - <i>rqu</i> | 「外へ、上へ」 | Adelaar and Muysken (2004: 231), Kalt (2015) |
| - <i>yku</i> | 「中へ、下へ」 | Adelaar and Muysken (2004: 231), Kalt (2015) |
| - <i>rku</i> | 「上へ」 | Adelaar and Muysken (2004: 231) |
| - <i>rpu</i> ²¹ | 「下へ」 | Adelaar and Muysken (2004: 231), van de Kerke and Muysken (2014: 143) |
| - <i>mu</i> | 「こちらへ」 | Campbell (2012), Kalt (2015) |
| - <i>pu</i> | 「あちらへ」 | Campbell (2012), Kalt (2015) |
| - <i>ku</i> ²² | 「主語の方へ」 | Kalt (2015) |

表 18 に挙げる接尾辞には、地域変種によっては現在使用されていないものや、動作の方向標示ではない機能を持っているものもある。例えば -*rku*、-*rpu* はケチュア I に属する変種では方向標示として生産的に用いられる (Adelaar and Muysken 2004: 231) が、アヤクーチョ方言では報告されていない。-*rqu* はケチュア II に属する変種であるクスコ=コリャ方言でも用いられる一方、動作の方向「外へ」を表す用法は化石化している (archaic) とされる (Kalt 2015: 39)。

表 18 に挙げた接尾辞のうち、アヤクーチョ方言で使用される方向接尾辞は表 19 に挙げる 5 つである。

表 19. アヤクーチョ方言で見られる方向接尾辞

| 形態 | 意味 |
|--------------|--|
| - <i>rqu</i> | 「外へ」「荒々しく、急に、唐突に」「完全に」「ちょうど~したところだ」、過去標示 |
| - <i>yku</i> | 「中へ、下へ」、丁寧さ・荒々しさ・恐れ・驚きなどの標示 |
| - <i>mu</i> | 「こちらへ」「あちらで」 |
| - <i>pu</i> | 受益者を導入する適用 (applicative) |
| - <i>ku</i> | 再帰 |

5 つのうち、方向標示としての報告があるのは -*rqu* 「外へ」、-*yku* 「中へ、下へ」、-*mu* 「こちらへ」「あちらで」の 3 つである。例えば、動詞 *apa* 「持ち運ぶ」に対し -*rqu*、-*yku*、-*mu* が接続

²¹ van de Kerke and Muysken (2014: 143) では -*rpa* が言及されているが、これは -*rpu* の異形態と考えられる。

²² 第 3.3.4 節で見た再帰標示 -*ku* を方向接尾辞として分析している。

すると、*apa-rqu*「持ち出す」、*apa-yku*「入れる」、*apa-mu*「持ってくる」を表す。*-pu*と*-ku*はそれぞれ適用標示、再帰標示(第3.3.4節参照)として使用されるものの、方向標示としての使用は一部の例外²³を除き報告されていない。

興味深いことに、方向接尾辞はしばしば類似した意味を表す動詞や名詞句、動詞接尾辞と随意的に共起する。例えば*-yku*は、動詞*yayku*「入る」や名詞句*uku-man*「中へ」など、しばしば同様の方向を表す動詞に接続したり、名詞句と共起する。(36)は、*-yku*が方向概念「中へ」を示す他の標示手段と共起する例である。

- (36) *kay runa=m yayku-yku-n danza-stin wasi uku-man*
 これ 男=FOC 入る-DIR.YKU-3SG 踊る-SR.SS 家 中-DAT
 「この男の人が踊りながら家の中に入り込む」(筆者のフィールドワークより)

(36)では*-yku*が動詞*yayku*「入る」に接続し、さらに名詞句*uku-man*「中へ」と共起している。つまり、(36)では「中へ」を標示する手段が3回現れていることになる。

同様に*-mu*も、類似した機能を持つ一人称目的語標示*-wa*(第3.3.1節参照)と随意的に共起する場合がある。例えば「彼/彼女が私を見ている」という出来事は、*qawa-wa-chka-n*、*qawa-mu-chka-n*、*qawa-mu-wa-chka-n*(*qawa*「見る」、*-chka*「～ている」、*-n*「彼/彼女が」)のいずれでも表されうる。このような類似概念を標示する方向接尾辞と他の標示手段の共起現象は、言語表現の経済性(Haspelmath 2021)に反する重要な事例である。

他の地域変種と同様、*-rqu*と*-yku*には動作の方向標示以外にも様々な機能が報告されている。例えば*-rqu*は、「完全に～した」という意味を表しうることが指摘されている(Zariquiey and Córdova 2008: 175)。(37)は*-rqu*が「完全に」の意味を表す例である。

- (37) *Juan cerveza-ta upya-rqu-rqa-n.*
 フアン ビール-ACC 飲む-DIR.RQU-PST-3SG
 「フアンはビールを飲み干した」(Zariquiey and Córdova 2008: 175、グロス は筆者による)

(37)では、*upya*「飲む」に*-rqu*が接続し、*upya-rqa*「完全に飲む、飲み干す」の意味を表している。さらに*-rqu*は、第3.3.2節で見たように過去標示として機能する場合もある。

*-yku*は「中へ、下へ」の方向標示の他にも、種々の感情的評価を表しうることが指摘されている。(38)は、*-yku*が「丁寧に、慎重に」の意味を表す例である(Zariquiey and Córdova 2008: 174-175)。

- (38) *Juan mikuna-ta yanu-yku-rqa-n.*
 フアン 食べ物-ACC 料理する-DIR.YKU-PST-3SG
 「フアンは食べ物を慎重に料理した」(Zariquiey and Córdova 2008: 175、グロス は筆者による)

²³ *ri*「行く」に対する*ri-pu*「去る」においては*-pu*が「あちらへ」の方向標示をしていると分析できる。

(38) では、*yanu* 「料理する」に *-yku* が接続し、*yanu-yku* 「慎重に料理する」の意味を表している。このようにアヤクーチョ方言の方向接尾辞は動作の方向を表すだけでなく、テンス・ヴォイスのような文法的カテゴリーや感情的評価など、より抽象的な概念も標示する非常に幅広い機能を持った接尾辞である。

3.3.6. 交替指示

アヤクーチョ方言には、3つの交替指示を示す動詞接尾辞を持つ。交替指示による従属節は、副詞従属節として機能する。表 20 は、アヤクーチョ方言で用いられる3種類の交替指示接尾辞と、それぞれの接尾辞によって作られる副詞従属節の機能を示したものである。

表 20. アヤクーチョ方言の交替標示接尾辞とその従属節の機能

| 接尾辞 | 従属節の機能 | 主語の交替 |
|--------------|--------|-------|
| <i>-spa</i> | 継起、共起 | なし |
| <i>-stin</i> | 共起 | なし |
| <i>-pti</i> | 継起、共起 | あり |

このように3種類の交替指示 *-spa*、*-stin*、*-pti* は、主節に対する時間的關係と主語の交替の有無が異なっている。

-spa は出来事の継起または共起を表し、かつ主語の交替が起きていないことを示す。(39) は *-spa* による交替指示の例である。

- (39) *allqu arco-manta lluqsi-ru-spa-n mesa uku-n-ta*
 犬 ゴール-ABL 出る-PST-SR.SS-3SG テーブル 中-3SG.POSS-ACC
pasa-ru-n.
 通る-PST-3SG

「犬がゴールを出て、テーブルの下を通った」(筆者のフィールドワークより)

(39) では、「犬がゴールを出る」という出来事と「犬がテーブルの下を通る」という出来事の継起関係が、動詞 *lluqsi* 「出る」に接続する *-spa* で示されている。さらに *-spa* は、これが接続する動詞 *lluqsi* 「出る」の主語と主動詞 *pasa* 「通る」の主語が *allqu* 同じ「犬」であることを標示している。

-spa の後には (39) における *-n* (三人称単数) のように主語の人称・数標示が随意的に接続する。この人称・数標示は、形態的には体言形態法における所有者人称・数標示の形態を取る。(40) は、*-spa* の後に二人称単数の主語標示が接続する例である。

- (40) *Mamá-y, ama hina ka-spa-yki, kay pampa-pi*
 母-1SG.POSS IMP.NEG そのような COP-SR.SS-2SG.POSS これ 原-LOC
suya-yku-wa-y huk rato-cha-lla.
 待つ-DIR.YKU-1.OBJ-IMP 1.NUM しばらく-DIM-だけ

「ご婦人、そんな風(頭部だけの女性の姿をした怪物が、話し手の首に寄生している)にしないで、この原っぱでほんの少しの間だけ私を待ってくださいよ」(Parker 1963: 7)

(40) では、コピュラ動詞 *ka* の主語である聞き手の人称・数(二人称単数)が、二人称単数の所有者人称・数標示と同形の *-yki* で標示されている。

-stin は出来事の共起を表し、かつ主語の交替が起きていないことを示す。(41) は、*-stin* による交替指示の例である。

(41) *huk qari=m alto-kuna-man pawa-stin calle-n-ta hamu-chka-n*
 1.NUM 男=FOC 高い-PL-DAT 飛ぶ-SR.SS 道-3SG.POSS 来る-PROG-3SG

「ある男の人が高く飛び跳ねながら道なりに来る」(筆者のフィールドワークより)

(41) では、「ある男の人が高く飛び跳ねる」という出来事と「ある男の人が道なりに来る」という出来事の共起関係が、動詞 *pawa* 「飛ぶ、跳ぶ」に接続する *-stin* によって示されている。*-spa* は継起関係と共起関係の両方を表し得るが、*-stin* はこのような共起関係のみを表す。さらに *-stin* は、交替指示標示を受ける動詞 *pawa* 「飛ぶ、跳ぶ」と主動詞 *hamu* 「来る」の主語が *huk qari* 「ある男」で一致していることを標示している。

-pti は、出来事の継起または共起を表し、かつ主語が交替することを示す。(42) は *-pti* による交替指示の例である。

(42) *wasi hawa-manta qawa-ri-pti-n=ña=taq, nina trueno*
 家 上-ABL 見る-INCH-SR.DS-3SG.POSS=COMPL=CONTR 火 雷
kununu-y=lla=ña hamu-chka-sqa.
 轟く-INF=だけ=COMPL 来る-PROG-PST.HYS

「(若者が)家の上から見ると、雷の火花が轟きながらやって来ていた」(Parker 1963)

(42) では、「(若者が)家の上から見ると」という出来事と、「雷の火花が轟きながらやって来る」という出来事が共起していることが、*-pti* によって表されている。さらに *-pti* は、交替指示を受ける動詞 *qawa* 「見る」と主動詞 *hamu* 「来る」の主語が異なっていることを示している。*qawa* の主語は明示されていない「若者」であり、*hamu* の主語は *nina trueno* 「雷の火花」である。

-spa と異なり、*-pti* の後には主語の人称・数標示が義務的に現れる。この主語の人称・数標示は、*-spa* と同様に所有者の人称・数標示と同形である。例えば (42) において **qawa-ri-pti=ña=taq* のように三人称単数の主語標示 *-n* を省略することはできない。

3.3.7. 体言化接尾辞

アヤクーチョ方言は、4種類の体言化接尾辞を持つ。表 21 は、アヤクーチョ方言の体言化接尾辞と、それぞれの体言化接尾辞で作られる体言化の主な機能を示したものである。

表 21. アヤクーチョ方言の体言化接尾辞と体言化の機能

| 接尾辞 | 主な機能 |
|------|--|
| -y | 行為の語彙的体言化、テンスを持たない補文 |
| -q | 動作主の語彙的体言化、動作主の関係節化、行為の目的を表す副詞節 |
| -sqa | 結果物の語彙的体言化、動作主以外の関係節化 (非未来)、補文節化 (非未来) |
| -na | 道具の語彙的体言化、動作主以外の関係節化 (未来)、補文節化 (未来) |

-y は、元の動詞で表される行為一般を表す体言を作る。例えば動詞 *kuya* 「愛する」に対し、-y は *kuya-y* 「愛すること、愛」という体言を派生する。-q は、動詞で表される行為の動作主を表す体言を作る。例えば動詞 *llamka* 「働く」に対し、-q は *llamka-q* 「働く人、労働者」という体言を派生する。-sqa は、動詞で表される行為における結果物や結果状態を表す体言を作る。例えば動詞 *upya* 「飲む」に対し、-sqa は *upya-sqa* 「酔っぱらった」という体言を派生する。最後に-na は、動詞で表される行為の道具などを表す体言を作る。例えば動詞 *puñu* 「寝る」に対し、-na は *puñu-na* 「寝床、ベッド」という体言を派生する。

これらの体言化接尾辞は、このような語彙的体言化だけでなく、*Maria qillqa-sqa* 「マリアが書いた(もの)」のような文法的体言化 (Shibatani 2019) にも用いられる。内部の項構造を持ち、従属節として機能する文法的体言化の機能と文法的特徴については、第 4.3 節で扱う。

3.4. 体言・用言の形態法テンプレート

アヤクーチョ方言の体言形態法のテンプレートは、概ね文法的カテゴリーごとに固有のロットを取る。表 22 は、名詞に接続する接尾辞の順を整理したものである。

表 22. アヤクーチョ方言の体言形態法テンプレート

| 文法範疇 (語根) | 指小辞・数 | | 体言ベース 体言化 | 所有者人称・数 | | 格標示 |
|-----------|-------|-------|--------------|---------|-------|--------|
| | 指大辞 | 数 | | 数 | 格標示 | |
| 接尾辞例 | -cha | -kuna | -yuq | -y | -kuna | -ta |
| | -su | | -sapa | -yki | | -manta |
| | | | | -n | | |

名詞接尾辞の中でも複数標示である-kuna は、語の意味に応じて位置が変化する。例えば「複数の子供を持っている人」は *wawa-kuna-yuq*、「子供を持つ複数の人」は *wawa-yuq-kuna* と表される。

アヤクーチョ方言の用言形態法のテンプレートは体言形態法のテンプレートに比べて複雑である。アヤクーチョ方言の動詞接尾辞は、概ね表 23 に示す順番で現れる。

表 23. アヤクーチョ方言の用言形態法テンプレート

| 形態 (語根) | -yku | -ysi | -r(q)u | -chi | -ku | -pu | -mu | -wa | -chka | -r(q)a | -su | -ni | -chik |
|---------|------|------|-----------|------|-----|-----|-----|-----|--------|--------|------|--------|-------|
| | | | | | | | | | | -sqa | -yki | -nki | -ku |
| | | | | | | | | | | | | -n | |
| 文法 | 方向 | | 方向 | 方向 | 方向 | 方向 | | | 人称・数 | アスペクト | テンス | 人称・数 | 人称・数 |
| 範疇 | | | テンス | | | | | | (人称階層) | | (過去) | (人称階層) | (人称) |
| | | | 随伴使役 (過去) | 使役 | 再帰 | 適用 | | | | | | | (数) |

アヤクーチョ方言の動詞接尾辞は主語・目的語の人称・数標示における人称階層標示-wa と -yki、-su のように、同じ文法的カテゴリーのクラスであっても別のスロットに現れるものがある。

さらに動詞接尾辞の中でも、-chi と -ku は共起する接尾辞によって局所的な順番の変化が見られる。表 24 は、三人称単数主語かつ現在時制の時に -chi、-ku、-rqu が共起する際の順番を整理したものである。

表 24. -r(q)u、-chi、-ku が共起する際の接尾辞の位置関係

| 語根 | -r(q)u | -chi | -ku | -r(q)u | 主語人称・数標示 | 全体の語形と意味 |
|------|----------------------|------|-----|--------|----------|----------------------------|
| arma | -r(q)a ²⁴ | -chi | | | -n | arma-r(q)a-chi-n 「洗わせた」 |
| arma | | | -ku | -r(q)u | -n | arma-ku-r(q)u-n 「自分を洗った」 |
| arma | | -chi | -ku | | -n | arma-chi-ku-n 「洗われる」 |
| arma | -r(q)a | -chi | -ku | | -n | arma-r(q)a-chi-ku-n 「洗われた」 |

しかし、アヤクーチョ方言の動詞接尾辞の出現スロットについては未解明の部分が多く、今後の研究が待たれる。

4. 統語論

アヤクーチョ方言では種々の接尾辞を用いた形態法が発達しているのに対し、統語的特徴は特に主節においては比較的単純である。アラインメントは一貫して対格型である (第 4.1 節)。語順は SOV を基本語順とするものの、項と動詞の間では自由であり、体言修飾では修飾部が被修飾部に前置される (第 4.2 節)。一方、アヤクーチョ方言の従属節は統語法と形態法・意味が相互作用する複雑な特徴を見せる (第 4.3 節)。

4.1. アラインメント

アヤクーチョ方言のアラインメントは格標示と人称・数の一致のどちらも一貫して対格型である。主節や副詞従属節では自動詞文の必須項と他動詞文のより能動的な項が同じ主格で標示され、他動詞文のより被動的な項が対格で標示される (第 3.2.1 節参照)。(43) は自動詞文、(44) は他動詞文における格標示の例²⁵である。

²⁴ -chi の前では異形態-r(q)a を取る。

²⁵ それぞれ (8)、(9) の再掲である。

- (43) *Juana-∅ wasi-n-pi=m puñu-chka-n.*
 ファナ-NOM 家-3SG-LOC=FOC 歩く-PROG-3SG
 「ファナが自分の家で寝ている」(再掲: Zariquiey and Córdova 2008: 94)
- (44) *ñuqa-∅ carro-ta=m riku-chka-ni.*
 1SG-NOM 車-ACC=FOC 見る-PROG-1SG
 「私は車を見ている」(再掲: Zariquiey and Córdova 2008: 95)

(43)において、唯一の必須項である *runa* 「人」が主格-∅で標示されている。(44)においては、より能動的な項である *runa* 「人」が主格-∅、より被動的な項 *pelota* 「ボール」が対格-*ta* で標示されている。このように、アヤクーチョ方言の格標示におけるアラインメントは対格型である。

アヤクーチョ方言における人称・数の一致も、格標示と同じく対格型のアラインメントを示す。自動詞文の必須項と、より被動的な項が三人称である他動詞文の能動的な項は、人称・数の一致標識が同じ形態を取る。(45)は自動詞文、(46)は他動詞文における一致標識の例である。

- (45) *ñuqa-∅=qa tusu-ni.*
 私-NOM=TOP 踊る-1SG
 「私は踊る」(Zariquiey and Córdova 2008: 171)
- (46) *ñuqa-∅=qa sara-ta miku-ni.*
 私-NOM=TOP とうもろこし-ACC 食べる-1SG
 「私はとうもろこしを食べる」(Zariquiey and Córdova 2008: 171)

(45)における唯一の必須項と(45)におけるより能動的な項は共に *ñuqa* 「私」であり、動詞に接続する人称・数の一致標識は-*ni* で共通している。このように、アヤクーチョ方言では人称・数の一致標示も対格型のアラインメントを取る。

他動詞文のより被動的な項が三人称以外である場合、より能動的な項とより被動的な項それぞれの人称・数の組み合わせに応じた一致標識が動詞に現れる。ただし、自動詞文や他動詞文の付加詞が一人称または二人称の指示対象と意味的に関連する場合も、他動詞文のより被動的な項が一人称や二人称の場合と同じ一致標識が現れ得る(第3.3節参照)。

4.2. 語順

アヤクーチョ方言の語順は、項と動詞の間では比較的自由である。一方体言修飾においては、原則的に修飾語が被修飾語に前置される。以下では具体例を挙げながらアヤクーチョ方言の語順を記述する。

4.2.1. 基本語順

アヤクーチョ方言の基本語順は SOV とされるが、語用論的要請に応じて柔軟に変化する。(47) は基本語順となる SOV 語順を取る例、(48) は SVO 語順を取る例である。

(47) *amigo-y pelota-ta hayta-mu-wa-n*
 友達(男)-1SG.POSS ボール-3SG.POSS-ACC 蹴る-VEN-1.OBJ-3SG.SBJ.1SG.OBJ
 「友達がボールを私の方へ蹴る」(筆者のフィールドワークより)

(48) *runa-cha hayta-ru-n pelota-n-ta sachá-man*
 人-DIM 蹴る-PST-3SG ボール-3SG.POSS-ACC 草-DAT
 「人がボールを草(草むら)へ蹴る」(筆者のフィールドワークより)

さらに VSO 語順など SOV、SVO 以外の語順も文法的に許容される。

4.2.2. 体言修飾

アヤクーチョ方言の体言修飾では、修飾語が被修飾語に前置される。(49) は形容詞が名詞を修飾する例である。

(49) *sumaq sipas*
 美しい 少女
 「美しい少女」(Parker 1969: 34)

(49) では、形容詞 *sumaq* 「美しい」が後置される名詞 *sipas* 「少女」を修飾している。

指示詞や数詞も形容詞と同様に被修飾語に前置される。例えば指示詞 *kay* 「この、これ」は *kay runa* 「この人」、数詞 *kimsa* 「3」は *kimsa runa-kuna* 「3 人の人たち」のように、それぞれ名詞(ここでは *runa* 「人」)に前置される。

格標示を伴う体言修飾も同様の語順を取る。例えば属格で標示される所有者は所有物に前置される。(50) は属格を用いた体言修飾の例である。

(50) *qam-pa wasi-yki*
 2SG-GEN 家-2SG
 「あなたの家」(Zariquiey and Córdova 2008: 91)

(50) では、所有者を表す *qam-pa* 「あなたの」が後置される名詞 *wasi* 「家」を修飾している。

4.3. 従属節

アヤクーチョ方言の従属節は、交替指示(第 3.3.6 節参照)や体言化(第 3.3.7 節参照)によって作られる。本節では交替指示による従属節(4.3.1)と体言化による従属節(4.3.2)について、統語的特徴を記述する。

4.3.1. 交替指示による副詞従属節

交替指示によって標示される従属節は、主節の出来事に対して継起または共起関係にある出来事を表す。交替指示標示は *-spa*、*-stin*、*-pti* の 3 種類があり、それぞれ主節に対する時間的關係と主語の交替の有無で異なっている (第 3.3.6 節参照)。

これらの交替指示による従属節は、主節の中で自由な位置で現れうる。(51) は交替指示従属節が主動詞より前に現れる例である。

- (51) *wak runa=m danza-stin hamu-ru-n carretera-n-ta*
 あれ 男=FOC 踊る-SR.SS 来る-PST-3SG 道-3SG.POSS-ACC
 「あの男の人が踊りながら道なりに来た」(筆者のフィールドワークより)

(51) では、交替指示従属節 *danza-stin* 「踊りながら」が主動詞 *hamu-ru-n* 「来た」に先行している。一方 (52) は交替指示従属節が主動詞より後に現れる例である。

- (52) *kay runa=m yayku-yku-n danza-stin wasi uku-man*
 これ 男=FOC 入る-DIR.YKU-3SG 踊る-SR.SS 家 中-DAT
 「この男の人が踊りながら家の中に入り込む」(筆者のフィールドワークより)

(52) では (51) とは逆に、主動詞 *yayku-yku-n* 「入る」が交替指示従属節 *danza-stin* 「踊りながら」に先行している。

このような従属節の位置のバリエーションは、(52) および (51) のような共起を示す従属節だけでなく、継起を示す従属節にも見られる。(53) は、継起関係を表す交替指示従属節が主動詞より前に現れる例である。

- (53) *amiga-y Maria-ta haya-pti-n Maria hamu-n*
 友達-1SG.POSS マリア-ACC 呼ぶ-SR.DS-3SG.POSS マリア 来る-3SG
pabellon-man.
 建物-DAT
 「私の友達がマリアを呼び、マリアが建物へ来る」(筆者のフィールドワークより)

(53) では、交替指示従属節 *amiga-y Maria-ta haya-pti-n* 「私の友達がマリアを呼ぶ」が主動詞 *hamu-n* 「来る」に先行している。一方 (54) は、継起関係を表す交替指示従属節が主動詞より後に現れる例である。

- (54) *Maria yayku-n pabellon-man kay-manta amiga-y haya-pti-n.*
 マリア 入る-3SG 建物-DAT これ-ABL 友達-1SG 呼ぶ-SR.DS-3SG.POSS
 「私の友達が呼び、マリアがここから建物へ入る」(筆者のフィールドワークより)

(54) では、主動詞 *yayku-n* 「入る」が交替指示従属節 *amiga-y haya-pti-n* 「私の友達が呼ぶ」に先行している。

このように継起関係を表す従属節の位置が自由であることは、類型論的に興味深い現象である。(53)(54)共に、従属節内で表される出来事は主動詞で表される出来事に対して時間的に先行している。このような場合に、(53)のように従属節が主動詞に先行する語順だけでなく(54)のように従属節が主動詞よりも後に現れる語順も許されることは、出来事と言語表現の類像性に反するという点で注目に値する。

4.3.2. 体言化による従属節

アヤクーチョ方言の体言化による従属節は、非常に幅広い機能を持つ。特に $-sqa$ と $-na$ による従属節は主語・目的語をはじめとする内部の項構造を柔軟に明示できるため、複雑な内容を従属節として表現できる。以下第4.3.2.1節では $-y$ 、 $-q$ 、 $-sqa$ 、 $-na$ それぞれによる従属節の機能、第4.3.2.2節では体言化従属節内の項標示について記述する。

4.3.2.1. 体言化従属節の機能

$-y$ で作られる従属節は動詞が表す行為をモノ・コト的に表し、主に補文として機能する。 $-y$ で作られる従属節は、例えば(55)のように意志動詞の目的語として用いられる。

(55) *atuq-ta hapi-y-ta muna-ni.*
 キツネ-ACC 掴む-INF-ACC 欲する-1SG

「私はキツネを捕まいたい」(筆者のフィールドワークより)

(55)では動詞*hapi*「掴む、捕まえる」が $-y$ によって体言化され、動詞*muna*「～を欲する、好む」の目的語として機能している。

$-q$ で作られる従属節は、動詞が表す行為を行う主体を表す。(56)は $-q$ による従属節の例である。

(56) *tanta-ta miku-q runa*
 パン-ACC 食べる-AG 人

「パンを食べる人」(筆者のフィールドワークより)

(56)では動詞*miku*「食べる」が $-q$ によって体言化され、「パンを食べる主体」を表している。この*miku-q*「パンを食べる主体」が名詞*runa*「人、男」を修飾し、(56)全体で「パンを食べる人」を表している。

$-sqa$ 、 $-na$ で作られる従属節は、動詞が表す行為の結果や道具など、行為に関連する主体以外の概念を表す。(57)は、 $-sqa$ で作られる従属節が関係節として機能する例である。

(57) *warmi=qa kay runa riqsi-sqa-n punchaw-manta,*
 女=TOP これ 人 知る-NMLZ.PST-3SG.POSS 日-ABL
pay=lla-pi=ña pinsa-n
 3SG=だけ-LOC=COMPL 考える-3SG

「女はこの男を知った日から、彼のことばかり考えている」(Parker 1963: 23)

(57) では、動詞 *riqsi* 「知る」が *-sqa* によって体言化され、「この男を知ったことに関連する概念」を表している。「この男が知った」の主語である *warmi* 「女」の人称・数は、三人称単数の所有者人称・数標示である *-n* によって標示されている。この *kay runa riqsi-sqa-n* が体言 *punchaw* 「日」を修飾し、*kay runa riqsi-sqa-n punchaw* 全体で「この男を知った日」を表現している。

-sqa と *-na* はテンスの観点で異なり、*-sqa* は過去または現在のテンス、*-na* は未来のテンスを表す。例えば *rura-na-yki wasi=qa...* (作る-NMLZ.FUT-2SG.POSS 家=TOP) 「あなたが建てる家は……」(Zariquiey and Córdova 2008: 223) では、関係節が示す「家を建てる」という出来事は未来の出来事であることが示される。

このような *-sqa* や *-na* で作られる関係節は、(57) における *punchaw* 「日」のように関係節内における行為の主体以外の要素を修飾できる。一方、**kay runa riqsi-sqa-n warmi* (「この男を知った女」を意図) のように、行為の主体となる要素を修飾することはできない。

さらに、アヤクーチョ方言の *-sqa* および *-na* によって作られる関係節は、外の関係(寺村 1992)の体言修飾も可能である。(58) はアヤクーチョ方言における外の関係の例文である。

(58) *ñuqa-pa llamka-sqa-y qullqi*
1SG-GEN 働く-NMLZ.PST-1SG.POSS お金

「私が働いて得たお金 (lit. 私が働いたお金)」(筆者のフィールドワークより)

(58) における被修飾名詞である *qullqi* 「お金」は、関係節 *ñuqa-pa llamka-sqa-y* 「私が働いた」内の項や付加詞として解釈不可能である。例えば、**qullqi-ta llamka-ni* (お金-ACC 働く-1SG) のように、動詞 *llamka* の直接目的語として解釈することはできない。このように *-sqa* や *-na* による関係節は、関係節内の項や付加詞とは解釈できない体言も修飾可能である。

-sqa、*-na* で作られる従属節は、格標示を伴い補文として機能する場合もある。(59) は、*-na* で作られる従属節が動詞の目的語として機能する例である。

(59) *suya-chka-n yarqa-y-manta runa ura-yka-mu-na-n-ta*
待つ-PROG-3SG 飢える-INF-ABL 人 降りる-中へ-VEN-NMLZ.FUT-3SG.POSS-ACC

「(魔女は)男が飢えて(木から)降りてくるのを待っている」(Parker 1963: 9)

(59) では、*-na* によって作られた体言化従属節 *ura-yka-mu-na-n* 「降りてくる」が対格標示を受け、主動詞 *suya-chka-n* 「待っている」の目的語として機能している。

4.3.2.2. 体言化従属節の内の項標示

アヤクーチョ方言の体言化従属節のうち、*-y* と *-q* による従属節では目的語を明示できる一方、主語を明示することはできない。この2種類の従属節の中では目的語の格標示に *-ta* と \emptyset (標示無し)の2通りが見られる。

-*sqa* と -*na* による従属節の中では、主語と目的語の両方が明示できる。ただし、実際のテキストにおいて主語と目的語を同時に明示する例は稀である。

-*sqa* と -*na* による従属節内では、主語と目的語の格標示にそれぞれ 2 通りのバリエーションが見られる (諸隈 近刊)。同様の体言化従属節での示差的主語標示 (differential subject marking, DSM) および示差的目的語標示 (differential object marking, DOM) はクスコ方言 (Cole and Hermon 2011, Lefebvre and Muysken 1988) やフニン・ワンカ方言 (Cole and Hermon 2011) でも報告されており、ケチュア語文法研究の中でも注目される現象である。

アヤクーチョ方言の -*sqa* と -*na* による従属節の中では、主語の格標示として - ϕ (標示無し) または -*pa* (属格)、目的語の標示として - ϕ (標示無し) または -*ta* (対格) が許容される。ただし、同時に主語を -*pa*、目的語を -*ta* で標示することはできない。(60) は主語の格標示のバリエーションの例である。

- (60) *Mana Raul- ϕ -pa qillqa- ϕ qu-sqa-n-rayku pay*
 NEG ラウル-NOM/-GEN 手紙- ϕ やる-NMLZ.PST-3SG.POSS-CSL 3SG
piña-ku-chka-n
 怒る-REFL-PROG-3SG

「ラウルが手紙を送らなかったで彼/彼女は怒っている」(諸隈 近刊)

(60) では、主語 *Raul* 「ラウル」に - ϕ と -*pa* の 2 通りの格標示が許容される。さらに (61) は、目的語標示のバリエーションの例である。

- (61) *Mana Raul qillqa- ϕ -ta qu-sqa-n-rayku pay*
 NEG ラウル 手紙- ϕ -ACC やる-NMLZ.PST-3SG.POSS-CSL 3SG
piña-ku-chka-n
 怒る-REFL-PROG-3SG

「ラウルが手紙を送らなかったで彼/彼女は怒っている」(諸隈 近刊)

(61) では、目的語 *qillqa* 「手紙」に - ϕ と -*ta* の 2 通りの格標示が許容される。このような主語・目的語の格標示のバリエーションは体言化従属節内でしか観察されず、主節では主語は一貫して - ϕ 、目的語は一貫して -*ta* で標示される (第 3.2.1 節参照)。

このうち、目的語の格標示のバリエーション (DOM) には、情報構造による選好が見られる。具体的には、目的語が対比的焦点にあたるか意外性を持つとき、あるいはその両方であるときに - ϕ よりも -*ta* による標示が好まれる (諸隈 近刊)。例えば (61) の例においては、「ラウルが送るべきだったものが複数あり、その中でも手紙を送らなかった」という目的語が対比的焦点となる文脈や、「ラウルは手紙を送るよう再三言われていたにも関わらず送らなかった」という目的語が意外性を持つ文脈では、*qillqa* を -*ta* で標示することが好まれる。一方、主語の格標示の選択については今後の調査が待たれる。

このようなアヤクーチョ方言の DOM は、類型論的に非常に興味深い特徴を持っている。まず、対比的焦点と意外性が DOM を動機付ける言語は他に報告が無く、類型論的に珍しい。さ

らにこの現象は、従来は情報構造の標示がなされないとされてきた従属節内でも情報構造の標示が見られることを示している。最後に、この現象は対比性が言語形式に反映されうる文法的カテゴリーとして認められることを示している (諸隈 近刊)。

5. 結語

本稿ではケチュア語アヤクーチョ方言の文法をフィールドワークで得られた最新のデータを交えて総論的に記述した。そして、その類型論的特徴を大きく音韻論・形態論・統語論の3つの観点から分析した。

アヤクーチョ方言の音韻論は通言語的に単純な特徴を持つ。通言語的に見ても規模の小さい音素目録を持ち、音節構造やアクセント規則も単純である。

アヤクーチョ方言は形態法が体言・用言共に発達した言語である。格や人称・数・テンス・アスペクト・ヴォイスをはじめとする数多くの文法的カテゴリーが接尾辞によって標示される。特筆すべきは用言形態法であり、随伴使役を表す固有の接尾辞など、類型論的に珍しい形態法も見られる。中でも特徴的なのは、方向接尾辞の存在である。方向接尾辞は代表的な意味である動作の方向だけでなく、テンス・アスペクト・ヴォイスなどの文法的機能や、話者の感情的評価など幅広い機能を持っている。

アヤクーチョ方言の統語法はアラインメントと語順の観点では単純である。アラインメントは格標示においても一致標示においても一貫して対格型である。語順は、体言修飾において修飾部が被修飾語に前置されることを除けば、原則として自由である。一方、特筆すべき特徴を見せるのは従属節である。従属節の中でも体言化による従属節は非常に幅広い機能を持ち、示差的項標示など統語論・形態論・意味論を横断する非常に興味深い現象を見せる。

略号一覧

1 = first person, 2 = second person, 3 = third person, ABL = ablative, ACC = accusative, AG = agentive, APPL = applicative, ASS = associative, BEN = benefactive, CAUS = causative, COM = comitative, COMPL = completive, CONTR = contrastive, COP = copula, CSL = causal, DAT = dative, DIM = diminutive, DIR = directional, DS = different subject, EMPH = emphasis, EUPH = euphonism, FOC = focus, FUT = future, GEN = genitive, HYS = hearsay, IMP = imperative, INCH = inchoative, INF = infinitive, LIM = limitative, LOC = locative, NEG = negative, NMLZ = nominalizer, NOM = nominative, NUM = numeral, OBJ = object, PL = plural, POSS = possessive, PROG = progressive, PST = past, REFL = reflexive, RQU = directional *-rqu*, SBJ = subject, SG = singular, SR = switch reference, SS = same subject, TOP = topic, VBLZ = verbalizer, VEN = venitive, YKU = directional *-yku*.

参考文献一覧

- Adelaar, Willem F. H. (1977) *Tarma Quechua: Grammar, texts, dictionary*. Lisse: Peter de Ridder Press.
- Adelaar, Willem F. H. (2012a) Historical overview: Descriptive and comparative research on South American Indian languages. In: Lyle Campbell and Verónica Grondona (eds.) *The indigenous languages of South America: A comprehensive guide*, 1–58. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Adelaar, Willem F. H. (2012b) Languages of the Middle Andes in areal-typological perspective: Emphasis on Quechuan and Aymaran. In: Lyle Campbell and Verónica Grondona (eds.) *The indigenous languages of South America: A comprehensive guide*, 575–624. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Adelaar, Willem F. H. and Pieter C. Muysken (2004) *The languages of the Andes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Campbell, Lyle (2012) Typological characteristics of South American Indigenous languages. In: Lyle Campbell and Verónica Grondona (eds.) *The indigenous languages of South America: A comprehensive guide*, 259–330. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Chow, Crystal (2021) Expressing paths of motion in Apurimac Quechua. In: Angelica Hernández and Butterworth M. Emma (eds.) *Proceedings of the 2020 Annual Conference of the Canadian Linguistic Association*. Tronto: Canadian Linguistic Association. <https://cla-acl.artsci.utoronto.ca/actes-2020-proceedings/> [accessed June 2022].
- Cole, Peter and Gabriella Hermon (2011) Nominalization and case assignment in Quechua. *Lingua* 121(7): 1225–1251.
- Dryer, Matthew S. and Martin Haspelmath (eds.) (2013) *WALS online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology.
- Encyclopædia Britannica (n.d.) Inca. In: *Encyclopædia Britannica*. <https://www.britannica.com/topic/Inca>. [accessed August 2022].
- González Holguín, Diego (1607) *Gramática y arte nueva de la lengua general de todo el Perú llamada lengua qquichua o lengua del Inca*. Lima: Francisco del Canto.
- Guillaume, Antoine and F. Rose (2010) Sociative causative markers in South-American languages: A possible areal feature. In: Franck Floricic (ed.) *Essais de typologie et de linguistique générale, mélanges offerts à Denis Creissels*, 383–402. Lyon: ENS Éditions.
- Haspelmath, Martin (2021) Explaining grammatical coding asymmetries: Form-frequency correspondences and predictability. *Journal of Linguistics* 57(3): 605–633.
- Kalt, Susan E. (2015) Pointing in space and time: Deixis and directional movement in schoolchildren’s Quechua. In: Marilyn Manley and Antje Muntendam (eds.) *Quechua expressions of stance and deixis*, 25–74. Leiden: Brill.
- Lefebvre, Claire and Pieter Muysken (1988) *Mixed categories: nominalizations in Quechua*. Dordrecht: Kluwer.

- Luykx, Aurolyn, Fernando García Rivera, and Félix Julca Guerrero (2016) Communicative strategies across Quechua languages. *International Journal of the Sociology of Language* 2016(240): 159–191.
- Maddieson, Ian (2013a) Consonant inventories. In: Matthew S. Dryer and Martin Haspelmath (eds.) *The world atlas of language structures online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. <https://wals.info/chapter/1>. [accessed June 2022].
- Maddieson, Ian (2013b) Consonant-vowel ratio. In: Matthew S. Dryer and Martin Haspelmath (eds.) *The world atlas of language structures online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. <https://wals.info/chapter/3>. [accessed June 2022].
- Maddieson, Ian (2013c) Vowel quality inventories. In: Matthew S. Dryer and Martin Haspelmath (eds.) *The world atlas of language structures online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. <https://wals.info/chapter/2>. [accessed June 2022].
- Morokuma, Yuko (2022) Quadrisyllabic ideophones in Southern Quechua: Constrained peculiarities in the phonology. *Asian and African Languages and Linguistics* 16: 241–260.
- Morokuma, Yuko (to appear) Motion event descriptions in Ayacucho Quechua. In: Yo Matsumoto (ed.) *Motion event descriptions from a cross-linguistic perspective*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Parker, Gary J. (1963) *Ayacucho reader*. Ithaca, NY: Cornell University.
- Parker, Gary J. and Donald F. Sola (1964) *The structure of Ayacucho Quechua*. Ithaca, NY: Cornell University.
- Parker, Gary John (1969) *Ayacucho Quechua grammar and dictionary*. The Hague: Mouton.
- Santo Tomás, Domingo de (1560a) *Grammatica o arte de la lengua general de los indios de los reynos del Peru*. Valladolid: Francisco Fernández de Córdova.
- Santo Tomás, Domingo de (1560b) *Lexicon, o vocabulario de la lengua general del Peru*. Valladolid: Francisco Fernández de Córdova.
- Shibatani, Masayoshi (2019) What is nominalization? Towards the theoretical foundations of nominalization. In: Roberto Zariquiey, Masayoshi Shibatani, and David W. Fleck (eds.) *Nominalization in languages of the Americas*, 15–167. Amsterdam: John Benjamins.
- Shibatani, Masayoshi and Prashant Pardeshi (2002) The causative continuum. In: Masayoshi Shibatani (ed.) *The grammar of causation and interpersonal manipulation*, 85–126. Amsterdam: John Benjamins.
- Shimelman, Aviva (2017) *A grammar of Yauyos Quechua*. Berlin: Language Science Press.
- Soto Ruiz, Clodoaldo (1976) *Gramática quechua, Ayacucho-chanca*. Lima: Ministerio de Educación.
- Torero, Alfredo A. (1964) Los dialectos quechuas. *Anales Científicos de la Universidad Agraria* 2(4): 446–478.
- University of Hawaii at Manoa (2022) Ayacucho Quechua. In: *Catalogue of Endangered Languages*. <https://www.endangeredlanguages.com/lang/8125>. [accessed July 2022].

- van de Kerke, Simon and Pieter Muysken (2014) The Andean matrix. In: Loretta O'Connor and Pieter Muysken (eds.) *The native languages of South America: Origins, development, typology*, 126–151. Cambridge: Cambridge University Press.
- van Gijn, Rik (2014) Subordination strategies in South America: Nominalization. In: Loretta O'Connor and Pieter Muysken (eds.) *The native languages of South America: Origins, development, typology*, 274–296. Cambridge: Cambridge University Press.
- Weber, David (1989) *A grammar of Huallaga (Huánuco) Quechua*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Zariquiey, Roberto and Gavina Córdova (2008) *Qayna, kunan, paqarin. Una introducción práctica al quechua chanca*. San Miguel: Pontificia Universidad Católica del Perú.
- 風間伸次郎 (2014) 「日本語の類型について-『アルタイ型言語』の解明を目指して-」 『北方言語研究』 4: 157–171.
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 I: 日本語文法編』 東京: くろしお出版.
- 細川弘明 (1988a) 「アヤクチョ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 (上) あ-こ』 457–458. 東京: 三省堂.
- 細川弘明 (1988b) 「ケチュア語族」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 (上) あ-こ』 1589–1608. 東京: 三省堂.
- 諸隈夕子 (近刊) 「ケチュア語アヤクチョ方言の示差的目的語標示と情報構造」 『言語研究』:

Typological Characteristics of the Grammar of Ayacucho Quechua

Yuko Morokuma

y.ukumari322@gmail.com

Keywords: Ayacucho Quechua, grammatical description, linguistic typology

Abstract

This paper offers a general description of the grammar of Ayacucho Quechua (ISO-639-3: quy) from a typological perspective. Ayacucho Quechua is one of the Quechuan languages spoken in the Southern region of Peru. After providing an overview of this language's phonology, morphology, and syntax, this paper examines the typological characteristics of Ayacucho Quechua. The phonology of Ayacucho Quechua is relatively simple. It displays highly agglutinating morphological features and is especially rich in verbal morphology. Furthermore, this language has simple syntactic alignment and word order features but complex subordination and nominalization structures.

(もろくま・ゆうこ 東京大学大学院人文社会系研究科)